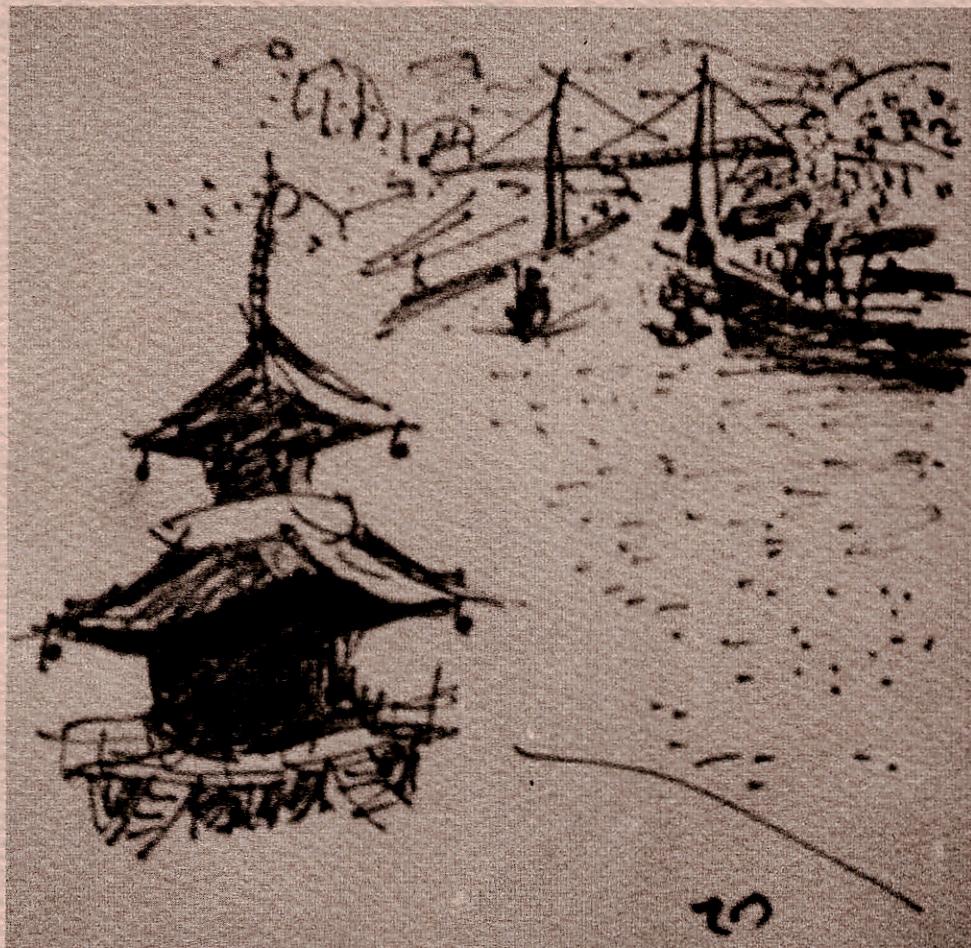


会報

平成9年～10年

「温故知新」特集号



尾道ロータリークラブ

はじめに

1997～98年度の会報をお届けします。

「故きをたずねて新しきを知る」、今回「温故知新」特集号としました。

古い会員の方はもとより、祖父嚴父を会員にもたれた2世3世の会員や、尾道東RC誕生のとき移籍された方々にも寄稿をお願いしました。

尾道クラブの創立50周年が近付いていますが、「温故知新」を改めて玩味したいと思います。また、八木ガバナーを送り出して10数年の歳月が過ぎましたが、いまだに他クラブの方々から八木先生の思い出をなつかしく聞くことがあります。今さらのように名ガバナーだったという思いを深くするのは私だけではないでしょう。八木ガバナーが毎月「ガバナー月信」に書きつがれた『語録』をまとめて再録しました。新しい会員の「ロータリーとは」という問い合わせに応えるテキストになるのではないかと思います。

ロータリークラブの例会は毎週です。プログラム委員の方はゲストの招聘に心をくだくのですが、尾道RCは財間先生という名講師を得て、毎月、有名な『財間節』を拝聴する幸運に恵まれています。当クラブの名誉会員でもある先生の講演は昨年、ついに300回に達しましたが、あたかも先生の白寿という類いまれな年でもありました。その三百回の演題を収録し、古今東西に亘る悠々たる歴史の流れを改めて見直したいと考えたことでした。

この小冊子を折りにふれご覧くだされば幸いです。

平成10年3月

尾道ロータリークラブ

会長 小倉伊徳

目 次

(アイウエオ順)

| | | |
|-------------------|---------------|----|
| レクイエム（鎮魂歌） | 入 船 裕 二 | 1 |
| 尾道RC入会前後 | 尾道東RC 大 塚 茂 | 2 |
| ロータリークラブを考える | 笠 井 祐 藏 | 3 |
| 八木、長谷川、片山、先生 | 垣 内 義 一 | 4 |
| 親の一光り | 渋 谷 仁太郎 | 5 |
| RC入会時のことごと | 尾道東RC 島 岡 弥三郎 | 6 |
| 30年を振り返って | 島 居 聰 | 8 |
| 南国の椰子の実と父親の背中 | 清 水 秀 樹 | 8 |
| 遠い思い出 | 高 橋 車 治 | 9 |
| 『八木先生のこと』 | 寺 本 守 三 | 10 |
| 『ロータリー』人間模様 | 中 雅太郎 | 11 |
| 大 脱 走 | 信 岡 於菟彦 | 14 |
| ロータリーの先輩「わが父」 | 日 暮 兵士郎 | 15 |
| 人物往来 ——— 愛と鞭 | 尾道東RC 藤 井 吉 藏 | 16 |
| 思 い 出 | 松 岡 真 雄 | 18 |
| 奉仕の理想について | 湯 浅 俊 男 | 18 |
| 対談「ロータリーの思い出」 | 大 林 義 彦 | 19 |
| | 入 船 裕 二 | |
| 小野鐵之助先生 | 藤 井 武 雄 | 21 |
| 財間八郎先生の卓話『三百回』を辿る | | 22 |
| 財間先生の卓話 | 入 船 裕 二 | 33 |
| 資料『八木ガバナー語録』 | | 35 |
| 新人会員の紹介 | 武鹿芳造・浅川泰生 | 66 |
| | 岩田法隆・村上博志 | 66 |
| | 中島秀晴・西村 洋 | 67 |
| | 山本 修・山田寅彦 | 67 |

レクイエム（鎮魂歌）

入船 裕二

入会したのが昭和38年1月。まもなく創立10周年の式典があったから、ずいぶん昔のことになる。同時に入会した山本芳雄先生（内科医）、大久保昌美さん、青木力雄さんみな故人となられた。すぐ後に入られた森さんにも弔辞を捧げたばかりだ。

広川正雄君が急死したのは、昭和41年6月のことだ。ちょうど次年度の役員のための地区協議会が松江で開催中だった。

次期会長は日暮喜八さん（兵士郎さんの父君）幹事が青木力雄さん。ほかに藤井武雄さん、大塚茂さん、吉田静明さんと私がいた。

昼の休憩が終って各々分科会の会場へ分かれた所へ私は電話だという。妻の声で、テレビが広川さんの交通事故死を伝えたと言う。「どこで？」「名神高速」。頭がクラクラした。

3時すぎ本会場へ帰って皆に伝えると一同声もない。「そりや、いのうや」と藤井さんが言う。その晩は温泉で一泊の予定だったが。

日暮会長といしばん若い吉田君に後を頼んで伯備線へ乗り込む。「今晚は皆さんと一杯」という会長さんのオゴリも雲散霧消である。

伯備線は遠かった。しかし、夏の日は長い。明るい内に尾道へ着き、広川邸へ走るが遺体はまだ帰っていなかった。

遺体を連れ戻したのは清水万蔵さんと藤井吉蔵さんだ。すぐ枕経が始まる。読経が長かった覚えがある。弔辞奉呈は清水さんだった。

清水さんが亡くなられたのは昭和57年1月15日、成人式の日で倉敷で本多順子さん（八木ガバナー事務所勤務）の結婚式があった日でもある。八木さん、藤井武雄さん、藤井吉蔵さんらと尾道駅で別れた後、電話。藤井武雄さんから、さっき別れたばかりなのに何だろうと、受話器を取り上げると、いきなり「清水が死んだ」。「どの清水？」「萬蔵さんじゃ」。怒鳴るように言う。「ニューヨークで死んだよううで」。この時も目まいがした。

福善寺の葬式は寒い日だった。会長だった私は弔辞を読んだ。

それから間もなく五月に吉田静明さんが逝った。これ

も急なことだった。温厚な人柄、しかし将棋は強かった。慶応の将棋キャプテンの貴禄。会長任期中、弔辞を二度読んだ。

八木パストガバナーとはヨーロッパ旅行もございました。公式訪問で山口の方へお供もした。呑ん兵衛の会計長と甘党のガバナーでどうかいなど冷やかされたが、ガバナーが気を遣ってビールを注文してくださった。のちに『八木語録』と言われたかずかずのガバナー訓話は今も記憶に鮮やかだ。

お葬式には衆議院議員の山中貞則氏が不自由な足を引きするようにしてはるばる見えられた。弔辞が凄かった。おそらく空前絶後だろう。『尾道文化』に全文が載っているけれど、それは文章だけで、文字通り声涙とともに下り、何度か絶句された当日の模様はその場に居た者でないと分からない。いっしょに泣いた人は多い。

葬式の終った後、八木夫人が「山中は昨夜も長い電話をして来たのに、弔辞はいつ書いたんでしょうか。汽車の中でも……」と言われたのを思い出す。

長谷川政雄先生の亡くなられたのは中国、武漢の病院で知った。同行の藤井さんの急病で夜中まで病院に居たが、大学病院とはいうものの、設備が悪い。添乗員がホテルへ毛布を取りに帰ったとき、FAXが来ておるという。田辺君の発信だが、広い大学病院でしかも夜中、電話がどこにあるやら、どうにもならなかった。帰るまで藤井さんにFAXは見せなかった。

長江小学校の先生だから、教えていただいてはないが、テニスの名手、プレーは何度か見た。RCへ入ることになったのも先生にうまくハメられたことによる。有難い、しかし、いつまでたっても、怖い先生だった。

去年、福島君。今年は青木君が逝った。三十代の頃からの付き合いである。酒もいっしょに遅くまで呑んで談論風発した。

藤井武雄さんは尾商の大先輩。俳句では全国に知られた人である。軽妙なスピーチ。思い出は数々ある。高橋武会長の時、私は幹事だった。高橋さんは会長になられていっそうロータリーを楽しんでおられた。任期が終ってもお宅で何度かご馳走になった。思い出すことは多い。

そして森さんの死。弔辞の中でいくつか思い出を述べることができた。それにしても、どなたがガバナーになられても風格のある名ガバナーにと言われただろうにと思う。

尾道 RC 入会前後

尾道東 RC 大塚 茂

尾道 RC 創立が昭和28年2月で、私達が入会したのは昭和35年2月なので創立当時のことはわかりません。それでも入会以来今日迄37年間たちました。

35年1月、尾道RCから「推薦があつて入会が承認されたので2月から例会に出席するよう」通知が来ました。年も若く仕事も忙しい最中だったので少々慌てました。本多龍太郎さん、広川正雄さんと3人で多少の面識のあった恵谷朝登さんを尋ねて長江のお宅へ伺いました。非常に寒い日で炬燵へ入れてもらって話をしました。その時の尾道RCの会長は尾道造船の浜根岸太郎さんで恵谷さんは幹事でした。「RCは出席の非常に厳しい会だそうですが、私達は仕事が忙しく出張も多いのでとても思うように出席出来ないと思います。入会をもし先に延ばして



親睦囲碁会 竹村家

もらえないでしょうか」と交々申入れました。恵谷さんは「よくわかった。然し健康上の理由や仕事の為の欠席はいくら欠席しても構はない。わしが責任を持ってやる。此際断はると二度と推薦されるかどうか、わからない。折角の機会だから是非入会しなさい。将来必ず君達の為になると思う」と懇切丁寧に諭してくれました。當時RCへ入会することは、紳士の仲間入りをすることで名誉なことと考えられていました。3人は恵谷さん宅を辞して「ああ云はれるのだから思い切って入会してみようか」と話し合いました。恵谷さんも本多さん、広川さんも皆亡くなってしましましたが、あの時の炬燵が懐かしく思い出されます。

2月の初め尾道RCへ一挙に9名入会しました。こんなに多勢同時に入会したのは其後もないことだと思います。

33人の会員が42人になりました。入会してみると島居哲さんを初め当時の尾道を代表するような偉い人ばかりです。若手会員の清水萬蔵さん、宮地昇さん、藤井武雄さん等が自分等より若いのが入会したので大変喜んでくれました。例会場は竹村家二階の大広間でした。当時近隣の市から各々有力者2-3名が尾道RCへ入会していました。其後昭和36年三原RC、40年松永RC、44年因島RCが尾道RCをスポンサークラブとして分離、新クラブとして創立されました。

其頃はゴルフをする人は未だ少く、尾道RCでは碁が盛でした。富永貫一五段を筆頭に藤井（武）、島居（完）、大佐古、西、小野、田中、原、木曾、大塚と有段者10名其他約10名、出席が多い碁会ではA、B 2クラスに分れて熱戦を展開しました。又福山、笠岡両RCと親睦碁碁会が年数回行はれ、行ったり来たりで親睦の実を擧げましたが、尾道RCが人数も多く断然強かったように思います。最近は尾道、尾道東両クラブを通じて碁をする人が殆ど居なくなったのは時節とは云へ大変淋しく感じられます。

入会当初尾道JCのお世話で尾道ライオンズクラブと尾道RC3クラブの親睦ソフトボール大会が何年か尾道北高運動場？で行はれました。古いことなので出場メンバーは忘れましたが八木先生や片山先生が出場、元気で活躍されておりました。皆半袖シャツか何かなのに富永茂さんが野球のユニホームに野球帽ときっちりきめて来場されたのでメンバー不足の折強力な味方と皆喜んだのですが「わしは野球もソフトもやったことがない」とそっけない返事で皆がっかりしました。それでも熱心に終りまで応援してくれました。試合はJCには勿論敵はないのですが、不思議なことにライオンズクラブには毎回勝ったように思います。

その頃、家族を含めての親睦旅行が時々行はれていきました。一番遠くへ行ったのは京都で、日帰り旅行でしたが夫人を含め多勢の会員が参加し、大林親睦委員長が小旗を持って先頭に立って案内されていたのを思い出します。又多分出来て間もなく亡くなった松永ゴルフ場へ家族同伴で見学に行きました。生憎の雨降りの中、藤井武雄さんと宮地昇さんがカッパを着て芝生の石に腰かけて絵を書いていたのが眼に浮かびます。小野先生に奨められて絵を書き出した初めての頃のことだと思います。37年の間に先輩諸氏は亡くなられたり退会されたりして私達より古い会員は宮地昇さん一人だけになりました。多くの場合そうでしょうが「昔は良かったなア」と若かりし頃の

RCのあれこれを懐かしく思い出しております。

終り

同時入会者（年令順）9名

沖本定七、佐藤暢三（教育長）、富永茂、宮本実（広銀支店長）、島居完、大塚茂、藤井吉蔵、本多龍太郎、広川正雄



親睦旅行 先頭を行く大林委員長



1961年世界大会田中元尾道短期大学学長と大塚さん



1962年家族会（鴨方町竹林寺天文台）

ロータリークラブを考える

笠井 祐蔵

私のロータリークラブ入会は昭和41年で、もう三十年前のことでもあり、当時は仕事が忙しく、その上スリーピングメンバーで余り表立った活躍も出来なかつたので、思い出して御話する程のことも記憶になく、責任を果たすことが出来るかと苦慮している。

入会以前は二、三のプライベートの会に入っていたが、唯酒を飲むだけの集まりであったので奉仕活動等には特に興味を持った事は無かった。当時父親がクラブのメンバーであったので、両親が話し合っているのを聞く機会もあったが、余りはっきりとした記憶が無く、唯当時例会場であった竹村屋での食事の献立の話をしていたのと、推薦した人が理事会で否決されて“困った困った”と言って居たのを聞いて大変な会だと思った位で、その他例会と言えば髭を剃り、ネクタイを締めて出て行くを見て益々これは大変だと思って居た。その為入会の推薦を受けた時は週一回の出席が出来るかどうか、ネクタイをしなくて良いかで、何回か入会を遠慮した様に覚えている。入会してからは何となく習慣になり週一回の出席も苦になら無くなつたが、急患で何度も中途欠席で帰つたものである。

此の会は出席率が重要で、それはそれなりに意味があり、常に出席が出来るよう工夫すべきであり、メイキャップという救いもある。それで規定の出席が出来ねば退会すべきである。1984年の年次大会の第5部会でこの問題が討議され、急用で出席できない時はどうするかと言う問題では、出来るだけ色々の事態を予め仮定して手当てをして置くべきであるという結論であった。

私の一つの思い出は創立二十周年記念式典の特別講演に時のマスコミの寵兒であった政治評論家の細川隆元氏招聘に関係したことであった。偶、日曜放談の相方が福山誠之館中学校の同級生の藤原弘達氏であったので折衝にあたり、前夜の歓迎会の宴席にも末席に侍らせて頂いたが、講演も宴席での話も殆ど記憶にないのが不思議である。ただ早朝の見送りの駅の寒かったことを覚えている。

もう一つは私が会長をしたのは昭和52-3年で、当時のガバナーであった廣沢忠彦氏から次期ガバナーを尾道から出して呉れと言われ、創立以来ガバナーを出してい

ないので是非出すべきと考え、全力を挙げて努力することをお約束したが、之は然し中々の難問題で元老と話をして、先ず八木寛先生に的を絞って数人の会員と先生の宅を伺ってガバナー就任を懇請したが承諾して頂けない。しかたなく次に島居完さんも数人の会員と自宅で就任を強引に口説いたが、我その任に非ずとご尊父の勧めがあつても受けて頂けない。あれこれするうちに返事の期限が迫り、諦めてお断りしようとした時、副会長の中さんがちょっと待てと、どんな経緯があったのか間も無く八木先生が受けますとの返事があり、大任が果たせてほつとしたことが心に残っている。

次に残念であったのは古い会員のM氏の推薦した某氏が何処でどうなったのか入会できず、間も無くM氏は会員を辞めてゆかれたが、その理由を明らかにするのが良いかどうか問題である。

今年会員選考委員長を受けたが、選考の基準がないので、一つ何を基準にすべきかを考えてみて次の項目を上げてみた。

1. その人の業界での評判、2. 社内での評判、3. 近所での評判、4. 家庭での評判、位でなら大体評価が出来るのではないかと考えたが、これでは厳重すぎて入会する人が居ないのではないかと1のみを記載を願うことにした。私も不合格である。

以上何かと私の都合の良いことばかりを書いた様であるが、都合の悪い事はなるべく忘れる事にしているのでご容赦を願いたい。



大林先生と片山先生（20周年式典）

八木、長谷川、片山、先生

垣内 義一

昭和48年6月1日が入会日となり、入会以来25年が近づいており、元気で皆出席をつづけさせてもらっています。

ロータリーのロの字も知りませんでした。入船先生より、JCに入らないかと問われた様に思います。先生にお任せ致します、しばらく何の話しもないで、ああ、あの話しは、途切れたのだと思っておりました。突然、ロータリーの20周年の記念特別講演、講師は当時、売れに売れている細川隆元先生の講演があるので、聞きに行かんかと話しがありました。一つ返事で講演を聞きに行くことになりました。当時の会長さんが長谷川先生で幹事は島岡さんでした。しばらくして入船先生よりJCは年が少し行き過ぎた。ロータリーはこの前の記念講演で経験した通りだ。もう入会の手続をとったので入れや、これでおしまい、入会となった次第です。

入会当日6月1日がやってまいりました。当時は例会場は広島銀行の2階で、まだ今の広島銀行ではなく建替え前の広銀でした。当日広銀の2階の例会場へ着いて、まずびっくり致しました。そしてまずしまったと考えました。足が振うとはこのことかと思いました。まず出迎えて下さったのが、当時の親睦委員長、青木秋義さんでした。当時会議所の会頭さんでした。当時はまだ尾道は新幹線素通り前で、経済も他の都市に先んじており、福山、三原、何するものぞの時代です。島居哲、日暮喜八、高橋武、金尾馨、山本雄二、八木寛の諸先生方、数えれば限りがありません。日立造船の工場長など繁栄しておった尾道を代表する人物が全部ロータリーの会員であったと言って過言ではありませんでした。そこへ最年少の新会員ですからびっくりするのも無理はありません。その後新会員として色々な方が入会されました。吉田真三、日暮兵士郎さん等多くの先輩が入会されましたが、皆、親父のような方々ばかりでした。若い者出てこいと言われれば当分小学生でした。ですから何から今まで親父のような人達でしたので、何の抵抗もありません。ただ、ただ勉強になりました。ロータリーについて先輩方の熱弁をただ、ただ聞いて勉強になりましたし、人生において大いに勉強が自分の為になったような気が致しております。

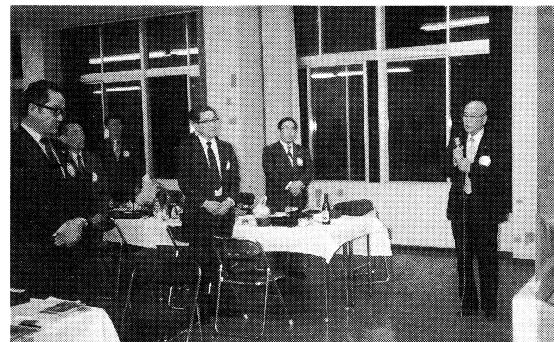
ガバナーを勤められた八木寛先生につきましては色々

親の一光り

渋谷 仁太郎

な方が思い出、お教えを語られると思いますので、片山健二先生についての思い出を小生流に述べて見たいと思います。片山先生ほど頭のよい人を見たことがないというのが、私流の見方です。真にロータリーの生き字引でした。国際ロータリーの定款、細則、決議等、細部に至るまで知り尽くすと言った方が当っているかも知れません。ロータリーだけではありません。当時は所得税の申告を税務署へ団体で申告する制度がまだのこっておりまして、その団体申告の医師会の世話を先生がなさっておられたのですが、その税法をよく知っておられたことたるや並大抵ではありませんでした。医師でありながら税法を勉強しておられたのには、おどろく他ありません。ある時ロータリーの例会で、化粧品の美容指導員の方が卓話をなさったことがあります。その節、男性化粧品のサービス品を配布されたことがあります。例会後すみやかに注意をなさったのを覚えておりますが、物をもらうのはロータリー的でない、ロータリーは奉仕をする者の団体である。キビシイ注意でしたが、本当にそうだと思いました。かように、その時、その時に応じて大きな声で皆さんにわかるように注意されておられました。皆、何の抵抗もなくよく聞いておりました。今先輩諸氏がご遠慮されてあまり注意をして下さらないので少しさびしい気も致します。

長谷川政雄先生について少し述べてみたいと思います。先生は何でもお出来になる偉大な人でした。皆さん先生、先生とお呼びしており、先生らしい先生でした。八木ガバナーの時の総括幹事もお勤めでした。法人会の会長など尾道の役職の重要な部分は、全部先生かと思われる方でした。その先生も法人会の会合で北陸の会合に出席され公務をおえられ帰途、北陸のある駅のプラット・ホームに倒れられ、一時は回復されて、その後何回か例会に出席されましたが、他界されました。先生が病院におられる時、私に手紙を下さり、色々なことを引受ける勇気より引受けることを断る勇気が必要なんだと書かれておりました。よっぽどあぶなかしく見えたことでしょう。



八木ガバナーをアメリカへ送る壮行会（長谷川代表幹事）

私の父は尾商を経て上阪、当時は第一次世界大戦で好景気だったらしく若いのに友人と商売を始めた様ですが、今様で云うバブルがはじけてうまく行かず、アサヒビールに入社しました。当時のアサヒ麦酒はシェアが70%あり昨今とは大違いで、ボーナスも年間12ヶ月分もあったそうです。

販売一筋で又任地も大阪から動かず終戦まで大阪支店に勤務しました。

その間2、3回転勤の話がありましたが何時も立ち消えとなったようです。その理由について後になって聞いた話では、大阪の得意先が了承せず「どうしても渋谷を担当から外すのなら考えがある…」と上司にねじ込んだというエピソードもあったそうです。

何れにしても販売活動には熱心で、昔は酒屋は1日と15日が休みで、日曜日は皆営業していたので父も日曜日の午前中は休んでも必ず午後は得意先を訪問していたのを子供心に覚えていました。

終戦後京都支店の責任者となり初めての転勤を経験し、京都ロータリークラブに入会させてもらいました。所謂転勤族ですが、停年をはるかに越え69才まで京都支店に在籍しました。京都ロータリークラブは文字通り名士の集りであったらしく千宗室等有名な人々との交流もその輪が広がった様です。昭和三十七年関西での生活に終止符をうち尾道へ帰郷しました。

文字通り悠々自適の生活が始まったのですが、縁あって尾道ロータリークラブへ入会させて頂き、昭和五十九年一月に他界するまで、はために見ても毎週金曜日が本当に楽しくて仕方がないと感じられるロータリーアンライフであった様です。

生前ロータリーについては、あまり聞かされた事はありませんでしたが、今から思えば出席については自分にも厳しかった様で藤井武雄大先輩からも「三原ロータリー

ヘメイクアップに行った所、途中糸崎から渋谷さんが乗車され、どうしたのですかと聞いた所、糸崎まで歩いて来て今から王原ロータリーへ行く所ですと云われ驚いた」と云う事を聞いたことがあります。「東クラブが出来、メイクアップも楽になった」とも話していました。

私達兄弟は八人で、殆ど関西に住んで居ましたが「皆がなるべく多く会う機会を作るよう」長男である私にすすめ、その会合に自分も参加するのを何よりの楽しみにして居り「度々会って話をすれば自然に仲が良くなる」と今から思えばロータリーの基本である親睦を家族の間でも大事にする様教えてくれていた様な気がします。

昭和60年父の逝去により独りになった母を見るため私も尾道へ帰郷しました。

そして父がお世話になった関係から信岡於菟彦先生の推薦で私も思いがけなくロータリークラブに入会させて頂き早12年が経ちました。諸先輩の御指導でロータリーの勉強もさせて頂きましたが特に寺本会長の折幹事に任命して下さり、老年の私を懇切に指導して下さいました事は本当に有難かったですと感謝しています。

そして1996～1997の尾道ロータリークラブ会長を務めさせて頂いたのですがこの事は誰よりも父が一番驚いたと思います。私は若い時から入学、就職等父の縁故等は全く関係のない人生を過してきました。

世の中にはよく「親の七光り」と云うことがあります。特に政治家、芸能界等では見ても「親の七光り」そのものを感じられることも多くある様です。

私にとって「親の七光り」は前述の様に全然無縁と思っていましたが、尾道ロータリークラブに入会させて頂いた事、又その後の色々の事を反省してみるとやはり「親の一光り」であった様な気がしてなりません。



渋谷さん、後は赤松・中・笠井さん（新年家族会）

RC入会のことごと

尾道東RC 島岡 弥三郎

「尾道ロータリークラブの古い話し」の作文の依頼を受けて、私がはや入会30年を経て、尾道クラブでも古参の部に入ってる事にあらためて、大へん驚いています。

入会は、1967年(S42年)、会長は片山健次先生、副会長は藤井吉蔵さん、幹事は大久保昌美さん、SAAは本多龍太郎さんでした。片山会長は、朗らかに大きな声で話され、かつロータリーソングを唄われ、和やかな楽しい雰囲気そのものの会長さんでした。当然入ってすぐには、中雅太郎委員長の親睦委員会に所属、親睦会でも、片山会長はKOボーイよろしく大学帽をかぶって元気一杯唄われたのが、昨日のように想い出されます。丁度創立15年にあたっておりましたので、会員の平均年令は、すでに60才近く、もちろん最年少の私は会員のお歴々に、只々こちこちの例会でした。小野鉄之助先生のひょうひょうとした紹介から始まるプログラム委員長のお話しが、大へん印象に残っています。

翌年度は、高橋武会長、清水萬蔵副会長、入船裕二幹事の皆様で、入会1年余り固くなっている私を見かねられたのか、入船幹事さんより、副幹事を拝命、例会での役員席には、大へん恐縮しました。

すでに会員数は65名となり、入船幹事さんは、早速事務局の本格化を計られました。

た。それ迄いさか片手間の仕事であった事務を藤原昭子さんにお願い、事務局も広銀尾道支店に正式に置き、書式一切を一新され現在に至っています。同時に例会場も竹村家から公会堂別館へ、年せまって、広銀尾道支店の2階へ移されました。役員の気持ちも見直され、大クラブへの布石をされたやに存じます。会報委員長は手塚景三さんで、超多忙の社長さんが、B5、4頁の週報を企画され、その編集・印刷依頼迄見事にやりとげられるのには驚きました。おそらく週報1年分の部厚の記録は、未だ破られておりませんまい。岡本説朗さん（中国新聞在勤）のユニークなプログラムも忘れられません。またこの年度に因島RCが誕生しました。因島から中山一郎さん、歴代の

日立造船因島工場長さんが古くから在籍されており、岡野吉衛さんが急ぎ入会されて、その準備に取りかかれましたが、因島では、はやくからLCがあり、その人選に大へんご苦労をされておられました。

RC家族会で日立造船因島工場長の出田孝輔さんは、「因島では特別扱いされて肩がこる、こうして尾道へ週1度例会へ出席するのを楽しみにしています」と云われたのが印象に残っています。出田工場長は、因島RC創立には加わられず、ご転勤まで尾道クラブに在籍されました。今想えば、突然の副幹事をおうせつかったこの年度は、いろいろの面で、尾道RCが変革を遂げた節目の年度ではなかったでしょうか。

翌1969年は、山本雄二会長、大塚茂副会長、吉田静明幹事、青木力雄SAAの皆様で、山本雄二さんのはほえましい会長、青木力雄さんのきりっとした礼儀正しいSAAと、ほのぼのとした年度だったと思います。出席委員長だった私は、幹事の吉田静明さんが毎例会後必ず例会場東向いの喫茶店で一息つかれるのに、よく誘われました。

「島岡さん、例会がまた一つ終りました。このコーヒーは美味しいですね」と目を細めて、くつろいでおられた様子が目に見えるようです。島居哲先生も大へんお元気な時で、そうそうたる尾道トップレベルの会員の方々のRCは、重厚な魅力のある会だと実感しておりました。

翌1970年は八木寛会長、宮地昇副会長、新宅紀夫幹事の皆様で、豊富な見識と巾広い趣味の香りある年度でした。すばらしくユニークな方々のもと、副幹事は二度目とはいえ、またとない充実した副幹事役をやらせていただきました。親睦委員長は、本多龍太郎さんで、上記御三人さんは、全く息の合ったもの、こんな楽しい一年はありませんでした。

尾道RCでやはり忘れられない年度は幹事を拝命した1972年(S47年)です。尾道クラブ創立20周年の年に

もなります。長谷川政雄会長、藤井吉蔵副会長、寺本守三SAAの皆様でした。クラブ切っての、クラブ通の会長、副会長ご両氏のもと、こんなに恵まれた幹事はないでしょう。しかも20周年行事というメイン行事のある年度で

すから、はっきりした大目的があります。私は随分緊張しております。当然クラブ行事は、20周年行事と並行



創立20周年記念講演会（壇上は細川隆元氏）

して実施されましたが、世代交代の大切な時期でもありました。長谷川会長は毎月報第一頁を飾られ、ロータリーの事、その例会、PR、諸会合、要望、隨想とロータリアンとして読ませる話しを書き続けられました。

20周年行事は1973年2月4日、式典は公会堂別館、祝宴は商工会議所で講演は細川隆元氏(1月の末日)記念行事は千光寺公園へ藤棚、記念誌となります。委員長は恵谷朝登さん、総務は青木力雄さん、記念誌編集は入船裕二さんの皆様です。

原案は藤井吉蔵さんのもと総務の青木力雄さんが練られ、各委員長がその具体案を出され、理事会で検討されました。使い走り役の私は、青木力雄さんとの打合せに明けくれる毎日でした。式典での寺本守三式典委員長の企画された進行司会は、すばらしいものでした。講師の



創立20周年記念当時の役員

細川隆元氏は藤原弘達氏のお世話だったやに存じます。お迎えに駅まで行きましたが、テレビで拝見するのとは違ひ随分と年を召され、足元がおぼつかないようでしたが、舞台に立たれると、しっかりされたのには、驚きました。祝宴では、私はどうしておったのか全然記憶がありません。日新らために、青木力雄さんとの一献は、ほんとうに美味しい美味しいお酒で、そのために20周年があったと申し上げたら、

あつかましい限りでしょう。

とりとめのない文になりました、平にご容赦下さい。

30年を振り返って

島居 聰

昭和28年といいますと、私はまだ6歳でしたので、ロータリーの事は何一つ覚えておりませんので、他人様からお聞きした事を書かせて頂く事しか出来ませんが、その点をご理解頂ければ幸いです。

私の父も祖父もロータリーについては、そういう団体がある、という程度の事しか言いませんでしたし、入会に際しても、欠席はしないように、もし欠席しなければならないときは必ずメーキャップするように、とだけ言われていましたのでロータリーそのものを理解せずに入会させて頂いたのも事実です。

尾道クラブが設立総会(1/30)を開いたときは日本は東日本と西日本の2地区だったそうです。そして認証状伝達式の時は4地区になっていたそうです。そのためガバナーは広島の方だったそうですが、パストガバナーは京都の鳥飼先生(京大の教授?)が来られたそうです。会場も広いところではなく、東校の講堂でした。

たとうです。そして式典の後、船に乗って尾道からおそらく鞆の沖あたりまで遊覧をして懇親会はまた東高まで戻って行われたようです。

この当時は例会場は竹村屋本館だったそうです。

またこの頃も出席義務は大変厳しく言われ、皆さん岡山か広島へ一口がかりでメーキャップをしておられたようです。まだ福山にもクラブは無かったそうです。

私が皆さんからお聞きした設立当時の話はこの程度しかありませんが今では尾道東、三原、福山とかずおおくのクラブが近くに有りますので、これからも皆出席を目指して頑張ろうと思いますので皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願ひ申し上げまして筆を置かせて頂きます。

南国の椰子の実と父親の背中

清水 秀樹

「遠き島より流れ来る椰子の実ひとつ」

有名ななうの文句ですが、本当にプカプカ波に乗って流されてきた椰子の実が実際に島にたどり着いて芽を出すのでしょうか?

じつは、みなさん!! 本当なのです。今回私はある団体の方々と一緒に南の島のパラオ共和国に行ってきました。そこの無数にある小さな無人島の砂浜にまさしく流れついた椰子の実が半分砂浜に埋まってそこから芽が出ているではないですか。

かつてこの国は酋長が支配する国だったそうです。今では大統領が統治していますが人口は1万7千人、国の中に信号が4つしかないようなゆったりとした国です、実は私の父も25年前にこの国を訪れていました、やっと最近になって日本からの直行便が月に2回飛ぶようになったらしいのですが、当時、25年前にはどのような手段で私の父が現地に赴いたのかはわかりません。しかしそのときの夢を持って出かけていき、現地にコンニャク農園を作るんだと言っていたのを覚えています。

きっと第二次世界大戦のさなかでも今回私が見た景色と全く変わらない風景を兵隊さんたちも見ていたのでしょうし、25年前に父も見ていたのでしょう。

私の父がパラオを訪れたのは確か54歳の歳だったと思います。私はまだその年には10年ほどあります、最近だんだん年をとってきたせいか(いぜんよりも)何となく父親の気持ちが想像できるようになってきたような気がします。

子供は親の背中を見て育つと言いますが、パラオの地にたってみて改めて15年前に他界した父の夢のようなものをかいま見たような気がした経験でした。きっと私の息子も何年か後には訪れるかもしれません。そのとき同じような気持ちで南国の椰子の実を見ることになるでしょう。

椰子の実のように、漂いながらも着実に島を見つけその地に根を生やして成長していくほしいものです。

遠い思い出

高橋 肇治

昭和36年6月に、島居哲さん（聰さんの御祖父）の御紹介で、大林義彦、片山健次両君と同時に尾道ロータリークラブに入れて頂きました。当時の会員数は40人位だったでしょうか。チャーターメンバーには島居哲、山崎千之（靖之さんの尊父）、赤松翁一、八木寛さん等のお名前が挙げられます。近い先輩では宮地昇、山本雄二、清水萬蔵（秀樹さんの尊父）、島居完、藤井吉蔵、長谷川政雄さん等が居られました。

例会場は竹村家（当主の武田英一さんも会員）で、広い疊敷きの部屋に椅子テーブルが並び、尾道港が眺められる一流の料亭だけあって、毎回の美味しい料理が出席の楽しみの一つでした。然し残念ながらその会場も長くは続かず、武田さんの退会を機会に広島銀行尾道支店に変更されました。新しい例会場は銀行の二階にあって土堂町本通りに面しており、向いの尾道郵便局の窓と向き合っていました。部屋は狭くて角突き合はせるようでしたが、会話をし易くて親睦を深めるのに適した雰囲気でした。食事は宇根本さんの大丸さんのお店にもお世話になったと記憶しています。この頃でしたか松永の丸山雷蔵さん（当時松永ロータリーはまだ設立されてはいません）にゴルフに誘はれたことがありました。丁度麻雀に夢中になっていた時で、とても両道はかけられないとお謝りしました。今にして思えば、狭い部屋で長時間麻雀の卓を囲んで汚れた空気を吸うより、爽かな大気と緑の芝生で時を過す健康的なゴルフを選ばなかったことが後悔の一つとなっています。とは云ってもあの頃の麻雀狂いは私の人生の大きな快楽の一駒となって残っています。

例会出席に次第に慣れてきて委員長を仰せつかるようになると、誰しも体験することですが、ガバナー訪問が苦勞の種となります。最近のガバナー訪問に較べると、あの頃は几帳面過ぎて固苦しかったような気がします。最も苦い思ひ出は空知ガバナー訪問の年でした。空知さんは当時音に聞こえた厳格な方で、油断していると槍玉にあがって絞られる有様で、大袈裟なようですが一同冷や汗をかいたものです。最近のなごやかなガバナー訪問とは雲泥の差でした。

チャーターナイトには初めの頃は毎回出席したもので、最初の中国四国大会は高松でした。同時入会の三人

揃って出席し、終って屋島遊覧をした時の情景はありありと脳裏に浮びます。最も印象に残っているチャーターナイトと云えば京都で行はれた大会です。今秋文化勲章を受けられた裏千家の千宗室さんがまだお若く、この大会の重要な委員長をなさっておられたようですが、尾道会員も大変お世話になりました。アトラクションが豪勢で、当時最盛期の宝塚歌劇出身のシャンソン歌手越路吹雪の舞台の須晴らしかったこと、祇園の舞子の縦踊りの絢爛豪華さも快い思い出となっています。

年度は忘れましたがスイスのローザンヌでのRI世界大会には尾道クラブより十数名が参加しました。島居哲、完さん父子、高橋武さん夫妻、宮地昇、藤井武雄、高橋肇治各夫妻等が加はりました。

最初の宿泊地アテネではパルテノン神殿を真正面に眺められるホテルに泊って感激の一夜を明かしました。翌日会場はローザンヌでしたがホテルはジュネーブのレマン湖畔にあり、湖水に高くあがる噴水に目を奪はれました。会場での行事は殆んど記憶に残っていません。フランス国境にあるカジノにも行きました。最終日パリーではムーランルージュ見物の席で、踊り子が舞台で綱渡りをしながら客席に向って投げた只一つのカンカン帽子が、私の席に舞い降りて手中に納まるとゆう幸運にも恵まれました。余興に島居完さんが誘はれるままに舞台の客の列に加はって上手にダンスを見せてくれました。

この国際大会の楽しい旅の経験が誇い水となって、以後毎年のように家内同伴で、家内が亡くなるまで外国旅行を続けるようになったと思います。以上思ひ出の一端です。



パリのムーランルージュでカンカン帽の当った高橋さん
左は八木、右は島居さん

『八木先生のこと』

寺本 守三

当クラブからガバナーを出せという要請は、十年以上前からあったと、聞いていました。広島県内でも、広島、呉の次が尾道クラブで、福山がその次、尾道が早くやってもらわねばというのは、当然の事です。松本パストガバナーの強い要請もあり、どうにかしなければという気運となり、片山、大林、長谷川、八木という長老が相談され、八木先生にお鉢が廻ったと思っています。尾道短大創立など、大変忙しい行事をし、これからは自分の好きな事をして、余生を送りたいと思っていたのにと、こぼしておられたのを思い出します。

地区大会で指名を受け、その後一年余りは、小堀先生の千種会に、ずっとお供しました。ノートはとらず、静かに正面を向いて、講義を聞かれていたのが、印象的でした。

ガバナー事務所は、長谷川先生が代表幹事、藤井武雄さんが副代表、入船会計長等、当クラブ、尾道東クラブより十数人の幹事が選出され、私は公式訪問担当という事で、選任を受けました。

八木先生の公式訪問の卓話は、ロータリーとは、空の星を取ろうと長い竿を振り廻す様なものではなく、自らの足元の小石を拾うものである。ロータリアンよ、君子は和して同せず。この二点を時間をかけて説かれました。話術には定評のある八木先生のこと、実に堂々たるものでした。

ガバナー事務所には、各クラブの概況報告が、前年とその年の二冊があります。私は簡単な要点をピックアップして、訪問の数日前に八木先生に届けます。終ったら訪問の結果を、RIに送ります。報告事項は全く簡単なもので、例えば、会長さんはよくやっているか、クラブの印象はどうだ、新クラブ設立の可能性は、財団のペーセントは、などで、まさか会長さんは駄目だと、クラブの印象は悪かったとか、書くわけにはいかないので、おしまいには、公式訪問の前に、報告書は出来ていました。

一番驚いたのは、100%出席クラブが、その当時、数クラブありましたが、尾道東クラブ、瀬戸内クラブなどがそれで、その公式訪問では皆出席をやめよと、正面から説かれた事です。実際あった事ですが、入院している会員を担架で例会場に連れて行き、100%の記録を続けていくとか、皆出席を重視するあまり、様々な不正がまかり通っているとか、とにかく、ロータリーライフを窮屈にしている、その弊害を取り除けという事です。小学生でも、風邪を引いたら、他人には移したらいけないので、欠席しなければいけない。その為、皆出席の表彰は小学校ではやっていない。結果的に、病気をせず一年間皆出席出来たと、個人が感謝するという事は、全く良い事であるが、クラブ会員全員に皆出席を強制する様な事は、クラブ会長のする事ではない。大の男のロータリアンが、皆



八木ガバナーご夫妻

出席の表彰を受け、嬉々としているのは、可笑しい事である、という論法です。これには陰で、大分文句がありました。松本パストガバナーも、八木さんこれを云ふにゃあ、良いガバナーだがなど、零しておられましたが、八木先生、平然としたものでした。

クラブアッセンブリーでは、概況報告はよく読んできた、委員長さんは、書いてある通りでは報告しなくとも良い。但し、その場合は私の方から質問するという具合で、これをやられると各委員長困って、かえって本音の発言が出て、盛り上るものでした。概況報告は二年分いっています故、委員長さんは、前年と全く同じことは書かないように、念のため。

国際協議会から帰られて云われましたのは、RIは、増強増強と頻りに云うが、分担金収入を増やす狙いが、見え見えで、衣の下に鎧が見えている。私がガバナーの時代は、新クラブは作らないという事でした。新クラブを幾つ作ったという事は、そのガバナーの勳章として記録される、これが常識でした。そうは云うてもなと、私達二つや三つはと、今の福山北クラブとか、今の東広島クラブとか、下話しされていたのですが、八木先生はがんとしてOKされず、代表幹事の長谷川先生も、八木先生頑固だから仕様が無いな、という事でした。

本多龍太郎さんなど、尾道東クラブの面々が、八木先生ガバナーの時代に、ローターアクトクラブを作ろうと、

勇んで言上したところ、まかりならんと断わられた事でした。

一番驚いたのは、先生の地元で、先生のご子息も居られた、松永クラブの、確か、二十周年ありましたか、招待状が参り、八木先生、メッセージだけ出されて、出席されなかった事です。つまり、クラブの周年行事は、そのクラブの喜びであって、直接RIサイドのタッチする行事ではないと云われるのであります。

ガバナーになると出費も多い故、尾道クラブ、尾道東クラブ全員が積立てをして、八木先生に出されたお金を、任期が終了すると、総て、お返しになられました。

その剛球投手の八木先生も、広島クラブの公式訪問の時だけは別で、確か皇先生だったと思いますが、八木先生の学生時代の恩師がおられ、それも、耳が遠いという事で、一番前の席に座られて、これには全く困ったと、こぼしておられました。

ガバナーの職務は全くの激務で、公式訪問にしても、一週間に三つか四つか廻らなければ

ばならず、その間、地区大会とか、諮問委員会、各地区委員会、ガバナー会議など、そしてまだIMとか、それもピンチヒッターは一切まかりならず、ガバナーの任期が終了して間もなく、八木先生は入院され、数ヶ月で亡くなられました。

松永のご自宅に皆集り、棺を担がしてもらいました。長江のお寺の本葬では、先生の教え子の、前の国務大臣の山中貞則さんが、その時はまだ半身不随の体をおしてこられ、三十分になんなんとする物凄い弔辞を読まれました。台湾の師範学校の担任教師が、若き日の八木先生で、山中さんがストライキか何かで退学になるのを、只一人頑張って、学校に残れるようにしてもらったという事です。これは、つい最近、日本経済新聞の、自伝の連載にも書いておられました。

八木ガバナーの一年間、私はカバン持ちで、方々お供させて頂きました。全くの大ロータリアンで、私の終生の師匠と思っております。

『ロータリー』人間模様

中 雅太郎

昭和40年入会以来、約33年間、多くの会員の方々との交流があり、亦お別れもあって、今、往時を偲べば、改めてその一駒一駒が懐かしく、鮮かに思い出され、私の人生にとって、大切な彩りとなって居る事を改めて実感します。それ丈に、色々な思ひ出の中のどれを取出して、書こうかと、迷いましたが、茲では、亡くなられた方との交流を中心に“舞踏会の手帳”的に思ひつくままに、舞台を廻して見ます。

私が入会当時は、囲碁、マージャン、ゴルフ、と三つの同好会があり、その参加人員も、この順番で、今でこそ、ゴルフ同好会は盛況ですが、当時は、此の近隣では松永カントリークラブのみで、コ

ンペえの参加者も7名前後であった様に思ひます。亦近隣クラブとの合同コンペも、時々開催されて居ました。

私はゴルフと囲碁の同好会に入りました。この囲碁の同好会員の中に、木曾健之助さんが居られました。木曾さんは当時、既に日本棋院の初段であったが、お互ひの自宅が近い事から、夕方になると、お誘ひの電話が、かかるてきて、週に3~4回、対局をして居た。木曾さんは、その性格が強気で、熱中するタイプであったから、午前様になる事も屡々で、お元気で、矍鑠として居られたものの、御老体でもあり、殊に冬場には体に障ってもと心配で、拙宅で対局する時は、遅いから止めましょうとは云い難いので、なるべく木曾さんのお宅へ出向いて、10時半頃には帰る様に心懸けて居た。

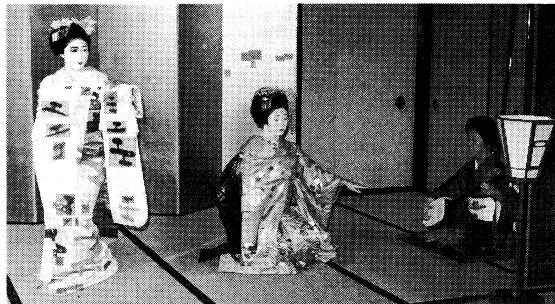
棋風は、その人の性格を反映すると云われるが、木曾さんの碁は性格その儘の強気の碁で、どんなに勝って居ても、更に相手を殺そうと、強引に攻めて来られるので、実力では木曾さんの方が上であるが、無理が祟って、私が逆転勝利する事も屡々で、その為、当初三目置いて居たのが、互い先に差が縮まって来た。そうした或日、「初段に推薦したよ。」と言はれたのには驚ろいた。日本棋院の（素人）初段取得の規約は、有段者が推薦し、定められた金額を払えば、初段の免状が貰える様で、その



祇園の舞妓と中さん

— 11 —

為の昇格試験は別になかった。併し、私はそれ迄も、プロについて教わった事も無いし、取ったり取られたりが面白い丈の、早打ちのザル碁で、初段の実力が無い事は、自分が良く知つて居り、この申出は辞退しようか、と思ったが、折角の御親切でもあり、有難く、お受けする事にした。暫くして日本棋院総裁、津島寿一と署名のある免許状が届けられたが、その事は公開するには気が引け



祇園の舞妓のだらりの帯

て、黙って居た。

その当時ロータリーの碁会の若手に清水萬蔵さん、藤井吉蔵さん、本多龍太郎さんも居られ、この三人は赤城プロに師事されて居り、実力も私より上であった様に思いますが、弱い筈の私が、初段を貰った事が、知らぬ間に漏れて、本多さんが、何時もの茶目っ氣を出して、「よし、中初段を、やっつけてやろう」と意気込んで居られた事を、今、昨日の出来事の様に思い出される。

昭和47年木曾さん急逝、本多さんも今は亡い。その本多さんも私も、ヘビースモーカーで、二人で議論する時は、タバコの煙が部屋に充満し、眼をこすり乍ら、亦矢継ぎ早に次のタバコに火を付ける有様で、喫煙問題の喧しい今の世相からすれば、隔世の感がある。私と本多さんは、ロータリー入会以前の、尾道青年会議所発足当時から親しくして居たが、色々な会合での舞台廻しが上手で、会の人事等、先手先手で根廻しをして、自分は、旨く会長職に就くのを逃れるのが常であったが、これもその人柄と公平さで、敢えて異論を唱える人も居なかつた様に思ふ。さりとて、何時迄も役職を逃れられる事を出来ず。後に尾道東ロータリーの会長や、経済同友会の尾道支部長に就任された。

その本多さんを羨ましがらせたのに、京都旅行がある。大正生れの尾道青年会議所OB10数人で「二八会」と云ふ会を結成し、毎月28日の晩、懇親会を開いて居り、亦何年かに一度は、小旅行も行って居た。昭和56年京都祇園

の有名な、「一力」茶屋へ行こうと云ふ事になった。併し、この「一力」は一見の客は受けないので、誰か口の利ける人は、と探したところ、当時会員であった瀧谷謹次さんが適任とわかり、島居完さんが、接渉の末、瀧谷さんの紹介で、11月4日、夕方に予約が決定した。

(瀧谷さんは、現会員の渋谷仁太郎さんの義父) 当日此の旅行に参加したのは6人で、その中、ロータリー会員は、島居完、大塚茂、湯浅、中、の4人、それに村上順彦、田久保高市の計6人で、昼は京都洛北の秋を満喫した後、夕方、祇園の赤壁、「一力」茶屋へ到着、女将自らの出迎へを受けて二間続きの広い部屋へ通された。流石に元禄の時代から栄えたお茶屋丈あって、黒光りのする太い柱に赤い壁のどっしりとした造作である。

先づお茶を戴き乍ら、同家に伝わる大石内蔵助の手紙等を拝見、女将の説明を受けた後、愈々宴会に移る。机の上には、おつまみ程度の肴が並べられ、酒徳利、ビールが並べられて居る。ここで驚いた事が起った。それは、女将を初め、年増の芸妓(三味線と歌)若い芸妓、それに舞妓2人の計5人が「こんばんわ、おおきに」と着物の裾を引いて、入ってきた。

名にしおう「一力」で、6人の客に5人の女性。これは少々の出費では済まぬぞ、と皆んな腹をくくった様である。暫く酒を飲み乍ら雑談したところで、舞妓2人が年増の芸妓の三味線と歌で、「祇園小唄」を踊る。暫く間を置いて、若い芸妓が、粋な踊りを披露し終ったところで「さあ、旦那はん、一曲どうぞ」と催促されたが、誰も口火を切らない。

それはそうでしょう。天下の一力茶屋で。流行歌も不粋だし、詩吟も雰囲気にそぐわぬ。さりとて長唄や小唄の素養は無い。瞬時、座が白けた。この儘では座が持たぬ。止むを得ず、旅の恥はかき捨て、と腹をくくって、芸妓の三味線で、下手な都々逸を唄って、お茶を濁した。



祇園の舞妓のだらりの帯

かくして、2時間余を楽しく過し、切上げたが、女将、芸妓が全員、玄関迄送って出たのは、流石と感心した。拐、一力を出たら、急に空腹を感じた。

一力の直ぐ近くに、京都南座があり、その一階のそば屋にかけ込んで、鯉そばを食べ乍ら、「一力」と、鯉そばの落差に一同大笑ひ。

その晩は、京都ソサイテイホテルに投宿した。

このホテルは、島居さんが会員の、会員制ホテルで、豪華では無いが、落着いた気持の良い、アットホームなホテルで、何よりも直ぐ裏が、鴨川堤と言ふ良い環境にある。何が縁になるかわからぬもので、後年吳クラブの真鍋さん（後のガバナー）から交換学生を京都に案内したいので、此の京都ソエティホテルを予約出来ないか、との依頼があり、島居さんに頼んで、実現した事があった。

それはさて置き、一力への支払ひであるが、後日紹介者の渋谷さんを通して請求します、と言ふ事で、帰りの電車の中で、一体どの位の請求が来るかを予測し合ったが、一人当4万～5万円位と云ふ予測が多かった。後日請求書が来たが、一人当23000円位であったと思ふ。これも渋谷さんの口利きの御陰であつたと思ひます。

かくして、京都旅行も思ひ出深いものになりましたが、後日話が、此の旅行に及ぶにつけ、参加出来なかった、日暮、藤井吉蔵、本多龍太郎、笠井の諸氏を、大いに羨しがらせたものです。

次に八木さんは、昭和55年

に、ガバナーに就任されたが、その時私は国際青少年交換学生委員会の地区委員長に就任させられた。その時の思ひ出、及び、八木ガバナーの大きな足跡については、他に譲り、茲では、公式訪問の随行幹事として、山口県の三クラブへ随行した時の裏話を書いて見ます。八木さんは「和して同ぜず」を信条とされて、公式訪問時の卓話でも、これを基調とした講演を行はれたが、公式訪問の前夜行われた、ガバナーと会長幹事懇談会でも、この態度で臨まれた。つまり御自分ではなく一つ一つの問題に、確たる自分の考へを持って居られたが、訪問先の会長さんには、課題を押付けるのではなく何でも困って居る事があつたら、遠慮無くお話なさいと云ふ態度で臨まれた。その為め会長さんは、奇麗事では無く、日頃人知れず困っ

て居る事等を、有の儘に打明けて相談されて居た。八木ガバナーは、これに対して、明確に自分の考へを、話された。その内容は茲に書くのは控えるが、翌日の公式訪問時、そのため会長さんは、私に、「有の儘の悩みを、ガバナーに打明け、ホッとしました」と明るい笑顔で囁かれたのが、今でも印象に残って居る。八木さんは、表面を繕った奇麗事は好まず、在るべき姿、ロータリーとして、行過ぎでは無いかと思はれた事には、一部の批判は覚悟で直言、指導されたと思ふ。

八木さんは大きな足跡を残してその任を終えられたが、昭和57年頃、滋賀大学附属病院へ入院された。丁度私が会長であった時で、私は大阪へ出張した時、足を延して、滋賀へお見舞に参上した。「何故、こんな遠くへ入院されたのですか」と尋ねたら、お嬢さんの御主人が、その病院のお医者さんとの事で、初めて滋賀へ御入院の理由がわかった。その後病も癒えて尾道へ帰られたが、昭和59年、逝去された。尚これには後日談がある。八木さんが亡くなられて何年か経った或晚、東京在住の末娘から電話で、滋賀病院のお医者さんに、伝手は無いか、と尋ねて来た。何でも、娘の友達が結婚して大津に居るが、子供さんが難しい病気の為、電話を架けて来た様で、急な事で無いと返事をしたが、後になって、八木さんを、滋賀病院に見舞った事を思い出した。そこで早速松永で、八木小児科を御開業の御子息に電話したところ、現在、滋賀大学の小児科の教授である

事がわかり、用件をお話したところ、早速電話で連絡して戴き、対応して戴きました。

人生は糾える縄の如し。一つの出会いが、波紋の様に、多くの次なる出会いへと広がって行く。この33年間を振り返れば、まだまだ書き留めない、多くの出会いがありました。亦ロータリーの行事についても、国際青少年交換学生の記録や、尾道ロータリー奨学会改革の経緯等、若い会員の皆さんに、書いて置きたい事もありますが、それ等は亦の機会に譲り、尾道ロータリー版、舞踏会の手帳を此の辺で閉じる事にします。



祇園に遊ぶ

大 脱 走

信岡 於菟彦

地区年次大会、IM等ロータリーの集会には努めて参加したが、ロータリーの勉強はそれとして、特に他都市で開催される集会に出席するのには別の楽しみがあった。つまり適当な時間をみて、集会を脱走してその町の観光に出掛けるのである。パネル討論会を聞いても、きまりきった模範解答が出るばかりで誠に面白くない。それよりも「地域を歩いて、ちかに肌で感ずれば、そのロータリーが理解出来るのだ」とかなんとかもっともらしい理屈をつけて会場を抜け出すのであるが、考えて見れば勉強嫌いなのである。時にはプログラムが進行中である筈の時間に、街角で同じ様な他クラブのロータリアンに出会って、思わず「ヤアー」と手を挙げてお互いに苦笑する事もある。回が重なると脱走仲間も常連化していく。

1983年10月萩市で開催された年次大会に参加した。例によって常連が抜け出す相談を始めたが、悪事はすぐに決まる。東クラブからも参加者が出て大脱走となつた。誘ったが、さすがにクラブ会長・幹事さんは遠慮された。ただこの時間のパネル討論会で、我がクラブの八木パストガバナーが、モデレーターであるのが気になつたが、会場を後にして町に出たら、そんな事などこれっぽちも頭の中に残つて居なかつた。

帰りの車中の事である。どやどやと乗り込んで「今日は面白かったなあ」とか言いながら友と並んで座席についたら、向かい合わせに八木先生が座られた。奥様がご一緒である。通路を挟んで反対側の席も脱走組である。まさかよりによって八木先生ご夫妻とトイメンに座るはめになるとは思いもよらなかつた。今から席を他へ移る事も出来ない。よもや脱走がバレる事はあるまいが、バレたらバレたでその時はその時と覚悟を決めた。

発車してしばらく差し障りのない話をして居たら、八木先生「君ら、会場のどの辺りに座っていたんか? 討論会で、簡単な易しい質問を尾道クラブに出して、花を持たしてやらうとステージの上から一生懸命に探したが、空席ばかり目立つてわからんかった」と言われたのである。それでなくても内心気がとがめている所だったので、まさに飛び上がるばかりであった。やっとの事で「先生、ちゃんと会場に居ましたよ。見つかりませんでしたか?」とか返事したように思うが、口の中はカラカラである。た

だ奥様が黙つてニコニコこちらを見て居られたのは記憶している。やがて、やおら、そしてさりげなく始められたロータリー創立当時の、排他的とも受け取られかねない想いがけない話から始まつた先生の車中ロータリー講座は、この上もなく面白かった。反対側の座席のメンバー達も、いつしか身を乗り出して聞いて居た。時々は笑い声さえ起つた。もう尾道かと思う程時間のたつのが早かつた。今から考えると、脱走組に対する先生の想いやロータリー補習講義だったかも知れないが、あんな講義なら度々聞きたかった。

これより前、1980年ロータリー第271地区、地区協議会が尾道市久山田、市立尾道短期大学で開催された。静かな環境ではあるが市街地からはかなり離れている。交通の便も今ほど良くない。開催前日、会場の準備をして居たら、八木先生が「ここなら脱走は出来ん」とニッコリされた。先生は以前からとっくにご存じだったのである。



車中の八木ご夫妻と信岡さん

ロータリーの先輩「わが父」

日暮 兵士郎

会報委員の方から「ロータリーの思い出ということでお昔のことを、何でもよいから書いてください」と、いとも易しそうに原稿用紙とともに渡して下さいました。この「何でもよいから…」と云われ、然もニコニコされるところが曲者です。今回のように「昔のことを…」と云われると、人間否私の頭なんて何も憶えていません。一晩「どんなことがあったのかナ…」と考えました。立派な先輩の方々の顔は、次々と思い出されますが、どれも文章になりそうにありません。思い余って最も身近かなロータリーの先輩・わが父のことを書くことにしました。

今から32年前の昔、1965年（昭40）の秋の晩でした。急に鳴りだしたベルの電話は、わが愛する父でした。「アノナー、こんどワシャーロータリーの会長になれーと云われとるンぢゃ、お前どう思う」「へー尾道ロータリーにゃ、人が居ないンぢゃナーなっちゃーいけませんデー断わりンさい」「ワシもそう思うンぢゃが、断われンのぢゃー」「でも出る釘はぶたれる、人さまの上に立っちゃイケンと云うとるぢゃないですか…ロータリーは別ですか」「ウン…イケンか…」ガチャン。

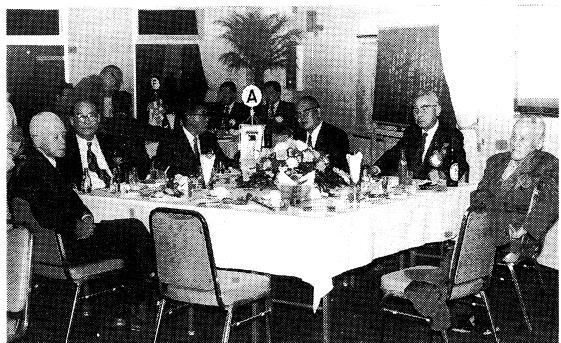
今考えてみると、歴代会長・理事会で次々年度会長も決まり、次年度理事が決まった段階だったのだろう。まだ先、まだ先と思っていたのに…せめて併に打明け、激励を受けて年越しをしたい…。こんな思いで、当時東京に住んでいた私に電話をしてきたのであろう。

今にして憶え、「お父さん、それは名誉なことです。元気を出して頑張りなさい。お父さんなら、きっと立派にのり切られますヨ」と何故言えなかったんだろう。懲愧に堪えません…。この馬鹿息子もお父さんの逝くなられた年の77才を超えた。今も後悔しております。

父は故人の青木力雄さんの幹事を得て、無事に会長を勤めあげました。コンビを組むとき「青木さん、可もなく不可もなくでやらんしょうで…」退任の挨拶「私のような野人でも、青木さんのおかげで勤まりました。やはり野で咲けれど草ーお目だるうございました。」と結んだと言う。



新年家族会で賞品の当った日暮喜八さんと片山会長
(竹村家)



ポールハリス・フェロー受賞祝賀会
右から小林画伯（特別会員）島居哲・日暮・藤井武雄・
金尾・赤松さん （昭和48年11月9日）

人物往来——愛と鞭

尾道東RC 藤井 吉蔵

旦那さんの集い

故本多龍太郎が「なんとのー、尾道RCへMUしたらのー、わしらより古い会員は2~3人しかおらなくなつた。」と、しみじみ語っていたことを思い出す。本多と私が、尾道RCへ入会させてもらったのは昭和35年であった。随分、低姿勢な物言いだと思われるかもしれないが、その当時クラブ内の雰囲気は、実にいかめしかった。

「君たちは入会させてあげたんだから、光栄に思いなさいよ」と、面と向かって言われたものだ。当時の先輩には島居哲、富永貫一、赤松翁一、山崎千之、浜根岸太郎、日暮喜八、笠井隆吉……（敬省略）といったご歴々。どちらを向いても頭は上がらない。とりわけ、私のように外野席向きの野人には、貴賓席は似つかわない。「やばい」と思ったが後の祭り。憂さ晴らしに本多、広川正雄とともに、しばしば夜の巷へ繰り出した。

一方、クラブ側は多少質は落ちても、使い走りが加入したことにより、運営がスムースになったにちがいないが、先輩は依然「君たち、入会させて上げたんだからね」と念を押すことを忘れない。

早い役員ローテーション

それからあらぬか、それからの13年間はよく鍛えられた。愛の鞭ともいいくべきか。副会長2回、ICGF（現在のIMより広範囲）のリーダーを2回。その他…故青木力雄の副リーダー6回には及ばないが息つく間もなかった。それにしても、入会後間もない若造に、かかる大役を押しつけるなんて、現在では到底考えられない。昭和41年のICGFは大竹市の三菱レーヨンで行なわれた。副リーダーを広川正雄に依頼し手助けして貰ったが、それから間もなくして、交通事故死した。

大物絵描き

私は尾道RCにいる間に、いろんな勉強をさせてもらった。わが師小野鐵之助とは以前から面識はあったが、RCで「絵を描いてみないか」と勧められ、それが病み付けて爾來30年。一向に腕は上達しないが、梁塵秘抄の「遊びをせんとや生れけむ」の心境を授かった。また、尾道RCの名譽会員であった小林和作画伯の聲咳に接することができ、望外のよろこびであった。余談だが、小林画伯の告別式の企画を…任され、画伯が生前愛しておられた

藤圭子の「夢は夜ひらく」のレコードを式場で流した。叱られるかと思ったら、いかにも飄々として居られた画伯らしいと好評だった。



ひしめく能弁家

尾道RCにはどういうわけか能弁家が多かった。例えば尾道RCが以前お世話になったガバナーが突然、MUに来られたとしませんか。現会長は当時の事情に明るくないため、つい島居哲初代会長に、唐突ながら挨拶をお願いすることになる。すると得たり賢し。このことあるを予見していたかのように、当意即妙な挨拶ことばが出てくる。誰かが小さな声で

「さすが元国会議員だな」。

次に八木パストガバナーの話は音楽でも奏でるかのように静に滑り出し、やがて気が付くと、まんまと話術に酔わされている。「あの、じらす所が、なんとも言えんなー」は痺れた者の溜息。

大林義彦会長は誕生日会員に贈ることばとして毎月の花曆を草稿を見ることもなく、娘々と述べられたのは驚きであった。会長が植物に強い秘密は名前にある。「オオバヤシヨ」は「おお林よ」「シヒコ」を下から読むと「恋し」となる。

それと忘れてならないのはユーモアたっぷりに笑いの渦を巻き起こし、しかも独特の哲学の持主であった俳句の指導者藤井武雄のスピーチである。

それもその筈。藤井武雄こと亘宗匠は俳句界の大御所鷹羽狩行を、今日あらしめた影の功労者であることは周知の事実である。また財閥八郎先生の文化講演がRCに定着したのは、昭和45年、藤井プログラム委員長をもって皮切りとする。

最近ガバナーの公式訪問で、印象に残るような話を聞いたことがない。私がぼけたせいもあるが、ガバナー自身も小粒になったのかもしれない。

一流の実務家

尾道RCには上述の芸術家や特殊技能の持主のほかに、一流の実務家も多かった。その一例を挙げると、創立15周年のときの片山健二会長である。私は副会長を仰せつかったが、実に行き届いた方で、職業を間違われたのではと錯覚する位、高次元な話から世俗的なことまで「何でもござれ」であった。ついで、尾道RC創立20周年の時には長谷川政雄会長の下で、記念事業担当の副会長としてお手伝いしたが、会長は抜群の実務家で、後に八木ガバナーの地区代表幹事を勤められた。

尾道RCには上述の外に、明治末期から大正生まれの一派人物が目白押しである。しかも、これらの指導者が社会にどれほど貢献されたか、計り知れないものがある。演劇の森信藏、国文学者の吉田真三、漢詩の入船裕二…。地元では目立たないが、ナショナルブランドとして光り輝いている。

地域社会と奉仕団体

顧みると、私が尾道RCにいたのは昭和35年の池田内閣から、昭和48年のオイルショックに到る、奇しくも高度成長期のど真ん中であった。

この間、地域社会も経済発展のお陰をうけた。

尾道のRCをはじめ奉仕団体や経済団体の誕生を追ってゆくと、地域社会との関連がよく分かる。もっとも、この略歴は私のメモから拾ったものであるから、あまりアテにならない。

《尾道における奉仕団体の誕生》

| | |
|-------|----------------|
| 昭和28年 | 尾道RC |
| 31年 | 広島経済同友会 |
| 32年 | 尾道JC（青年会議所） |
| 34年 | 尾道LC（ライオンズクラブ） |
| 38年 | 瑠璃LC |
| 43年 | 向島LC |
| 49年 | みなとLC |
| 49年 | 尾道東RC |

上記諸団体のうち、私が関与したのは広島経済同友会を振り出しに、翌年尾道JCに加入した。尾道JCは昭和35年卒業し、やれやれと思っていたら、本多に誘われて尾道RCへ入会することになった。ところが、本多の父上がLC会員であったことと、私が経済同友会の幹事をしていたことから波紋を生じたが、何とか納めて貰った。

本多とは小学校、尾商、軍隊以来の同期で、私は彼のあとを歩いた。彼はマクロ的視野から社会を眺め「尾道には良識人は多いが、敵を造ることを嫌がり、避けて通っている。」と嘆いていた。

本多は晩年川崎病院に入院しているときも、苦しい息の下から、国政や市政について「公憤」のことばを心ある友のところへ電話していた。

閑話休題。わが尾道東RCは昭和48年尾道卸センターが設立したことにより誕生したクラブで、ここに到るまで長年月を要した。新クラブ結成に当たり、尾道RCから12名の助っ人が尾道東へ移籍することになった。私が冗談半分に「使うだけ使って追い出すきか」と言ったことが、八木特別代表の耳に入り、思わず迷惑をかけた。代表はことある毎に「転属ではありませんから」と、釈明しておられた。「転属」というのは軍隊用語で、他の部隊へ移籍することを謂う。ところが、移籍組は私のようにデキの悪いのが多かった。

しばらくして埋合せのためか、八木ガバナーが就任される時、本多と私は地区幹事を拝命した。

それはともかく、尾道RCに在籍中、すぐれた先輩と親交を結ぶことができたことは、まことに幸運であったと深く感謝している。

冒頭に本多が述懐していた通り、顧みると親しくして戴いた先輩の多くが鬼籍に入れられ、淋しい限りである。今回懐かしい往時を回顧する機会を与えていただき、心から厚くお礼を申しあげたい。



懇親会で歌う（左から）藤井・本多・大塚さん

思　い　出

松岡　眞雄

奉仕の理想について

湯浅　俊男

尾道ロータリークラブに入会して25年の歳月が経過しました。回想すればその間色々な思い出が去来しますが、本日は取って置きのお話しを致します。さて過ぐる年私がクラブの会長を仰せ付かったので平素から畏敬して止まない故片山健次元会長にご挨拶のためお伺い致しましたときの事です。

私共お互い時間のたつも忘れ種々雑談致しましたが、先生が突然次のようなことを仰言いました。「持光寺さん、あんたの次はテラ（寺本会員）、それから助役（故小林会員）、次いで向島（佐伯元会員）、その次は教育長（友成会員）と私は徒然なるままにこんなことを考えていますが如何なものでせう？これは私とあなたの間の内緒話です。人事マル秘ですよと仰言って大笑いされたことがつい昨日のことの様に思い出されますが、あの当時の先生の届託のない無邪気な（失礼）お姿を思い浮かべ感慨一入なものです。

先生のご冥福を心より祈念して筆をおきます。合掌。
追伸　マル秘ですよと仰言った先生とのお約束を破ってしまったのでご無礼をご令息である片山寿会員に深くお詫び致します。



鳥取の合同地区大会で
パネラーを勤める片山先生

会報委員会からの依頼で、設立間もない時代のロータリーの活動の様子を伝えるようにとのことでありますが、小生は昭和46年10月に入会しましたので、尾道ロータリークラブが創立後44年を経過している現在、最古参のチャーターメンバーの方は既にご在籍ではなくその時の様子はお聞き致して居ません。時々先輩会員の方々からは、断片的にお話を伺っていますが、具体的に原稿にする程のことが思い浮かびませんので、ガバナー訪問の時に常々話題になる職業奉仕に就いて考えてみたいと思っています。

久しぶりにロータリー手帳を開いてロータリーの綱領の部分を読んでみました。すなわち、ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある云々……、とあります。英文と対比して何とか理解できたような文章で色々難解なことでありました。

この職業奉仕はロータリーの最も大切な中心課題であるが、他の奉仕団体が持っていない理想であるために、以前からこの奉仕の深い内容を分かりやすく表現する試み再度繰り返されてきたのであります。この職業奉仕の理想に就いて、最初に定義したのが、西暦1910年（明治43年）にA・F・シェルドンによって職業人の職業奉仕に対する行動基準は「利己 egoism と利他 altruism の語にしたのが “He Profits Most Who Serves Best”（最もよく奉仕する者は、最もよく報いられる）と云う内容です。次いで西暦1912年（明治45年）に、再度シェルドンらによって “Service Above Self” と云う利己より奉仕を先ず優先さすという厳しい内容であり、経営者にとって非常に高度な立場に立って遂行する勇気が必要であります。

この様な理念を掲げて、シカゴで青年弁護士ポール・P・ハリスが3人の友人と語らい合い、今から92年前の西暦1905年（明治38年）2月23日に、第1回の会合を開いたのがロータリークラブの誕生の第一歩であった。その頃は丁度現在の日本に似た経済恐慌で人心の荒れ凄んだ頃であり、ロータリーとは、会員が順番に持ち回りで集会を開いたことから名付けられたのは皆さんもご承知のことであります。このロータリーの集会による親睦

fellowship を通してお互いに切磋琢磨の場としてこの職業奉仕の理想に達することを心掛けたと云います。従って我々は職場では、世の為、人の為に職業を通して活動できる環境を整える努力が必要あります。勿論我々の社会は自由経済で自由競争に打ち勝っていると云う条件が必要であり、その競争に打ち勝って選ばれたものが集まって切磋琢磨しているのであります。

最近のロータリーではややもすると時代の変化により止むを得ない事情が有るにせよ、国際的な色々なプロジェクトが多くあり、どうかすると職業奉仕やロータリークラブ独自の活動があまり盛んでない様に思えます。この辺で初心に戻りロータリー本来のロータリー綱領に則った方向に戻ることを心掛けてもよいのではないかと思います。本年度のRIのテーマである“ロータリーの心 Show Rotary Cares”は、職業奉仕を再認識して、その原点に戻ると云う意味と捉えてても好いのではないかと考えています。然しながら、“ロータリーの心 Show Rotary Cares”の英文は命令形であり、我々ロータリアンにとっては誠に厳しい標語であり、ロータリアン一人一人が心すべき問題であると考えています。我々は今、自己の職業とロータリーの職業奉仕を結びつけて行動しているか？また職業活動にこのロータリーの理想を入れる様に努めているか？大いに反省すべき点であり、内心忸怩たる心境であります。お互いに勉強してキンロス会長の立派な標語に答えることが大切であると考えています。

対談「ロータリーの思い出」

大林義彦：入船裕二



新年例会で大林先生と入船さん（昭和63年1月）

入船 先生が尾道ロータリーは入会されましたのは昭和36年6月。

大林 そう、そう。亡くなった片山健次君と高橋重治君と一緒にいた。会長が短大の学長だった……。

入船 田中稲穂さん。

大林 そう、そう。6月入会だから、すぐ新年度に入って、会長が弁護士の山崎さん。君が入ったのは？

入船 私は38年1月です。

大林 そうかなあ。君の方が早いと思つたが。39年には、会長をせえと言われて、まだ3年目で、いかにゆうても早すぎる。まだ、なんにも分からん。それが、どうしても、ムリヤリさせられた。幹事を清水万蔵さんに頼んだ。

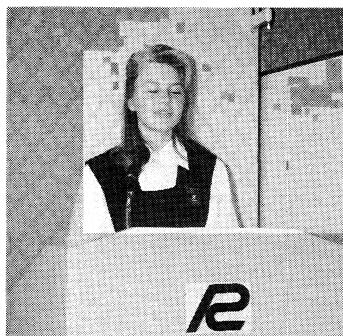
そしたら、I・C・G・F。「インターナショナルホーラム」か。公会堂で大事だったなあ。

入船 あれは大変でした。NHK尾道支局長だった原さんが秒単位のスケジュールを作られた話もありました。

大林 会場があそこだったので、特別なテーブルをつくった。

入船 そうです。公会堂の席では筆記ができないんで、座席の前にかけて筆記も、食事もできる台をつくりました。

あれから後、尾商の同窓会を公会堂でやった時にも、あの台を使っていましたね。



交換学生のスピーチ

- あの台はその後どうなりましたか？
- 大林 ガバナーが広島の正岡さん。の方は名ガバナーだったなあ。
- 入船 『20周年記念誌』を見ますと、I・C・G・Fの写真が載っていまして、大林ホームクラブ会長、副会長が山本雄二さん、幹事が清水万蔵さん。SAAが島居完さん、それから日暮喜八さんの顔が見えます。
- 大林 みなさん、ウンとお若い。それから、当のソングリーダーが神田さん。地区大会で表彰してもらひた。出席率がええといふんで。（この年、第7位）その時じゃなかったかな。ネパールへ古切手を送る運動を始めようという話。
- 入船 そうでした。あれはずいぶん長く続きました。例会の席で窓口だった三都新聞社の方を招いて切手を受け取る、表彰をするといったことが何回もありましたな。（最終500万枚）
- 大林 あなたと松江へ行ったなあ。
- 入船 あれは先生が分区代理、高橋武さんが会長で、私が幹事の年でした。
- 大林 あの時はずいぶん呑んだなあ。
- 入船 徳利がズラット並びました。
- 大林 もう止めるか、いつ止めるかと思ってたが、いっこう止めん。
- 寝るのか、思うたら、まだ外へ出る。面白かった。
- あれから、因島RCが出来た。
- 入船 そうです。なんべんか、因島へ行きました。
- 大林 松永RCもあの頃、できた？丸山さんがいたな。
- 入船 そうです。松永の方が少し早かった。
- 大林 いつだったか、国際大会へ行ったことがある。ハワイの世界大会。
- 入船 私が幹事の時です。昭和44年でしょ高橋会長、清水副会長、島居大先生。あの時は10人ぐらい、外にご家族も参加されて。
- 大林 出発の前に、壮行会を兼ねた親睦家族会があつて、
- 入船 先生、大林分区代理が送別の言葉を贈られたんです。
- 大林 それは覚えてない。
- 入船 あれからでしょう。国際大会へ行くようにな
- ったのは。
- 大林 あの頃は、親睦旅行は遠方へ行ってたなあ
- 入船 そうです。先生が親睦委員長のときでしょう。京都へ行ったのは。
- 大林 大徳寺、金閣寺、竜安寺、嵐山だった。鞆、阿武兎へも行ったな。
- 入船 姫路城へも行きましたよ。
- 大林 この頃はあまり遠方へは行かない？
- 入船 そうみたいですね。
- 大林 今日はだいぶ昔話をしたな。
- 入船 また、つづきを聞かせてください。



大林先生の喜寿
(右隣より) 藤原勝子先生・入船・高橋聿治さん

小野鐵之助先生

藤井 武雄

小野鐵之助、八十一才、もと婦人科医、現在は医業を廃して、余技の画業に遊ぶ一介の野人。私たちはこの一市井人を「小野先生」と親しみと尊敬をこめて呼ぶ。

茫洋としたところは仙人のようであり、情熱的なところは芸術家であり、正義感の強いところは憂国の士であり、世智に疎いところはさながら三才の童子である。この類い稀な一人格に触れるとき、私たちは砂を噛むようなこの世にも、かくも清冽な泉のあることを発見し、心洗われる思いを新たにするのである。

小野先生宅の入り口のガラス戸に、油絵具でこんなことが書いてある。

「泥ちゃんのほかはどなたでも歓迎」。

この言葉に嘘はない。私たち訪問者は「今日は」とも言わずに奥へあがりこみ、だまって座ればそれで足りる。先生はかたわらに一升瓶を置き、ちびりちびりやりながら絵を描いているか、ときには大いびきで昼寝している。「来る者は拒まず、去る者は追わず」、行雲流水は小野家の家風であろう。

先生の交遊の広さはこのことを如実に示す。中川一政画伯のような著名人から、横丁のおっさんまで、みなよき友なのだ。故小林和作画伯との水魚のまじわりは、今さら語るまでもあるまい。

多芸多能。テニス、スキーから、囲碁、将棋、麻雀、魚釣り、パチンコ。「日々是好日」と言う言葉は、先生のためにある、とさえ思われるのである。

尾道の文化は小野先生をのぞいて語ることはできない。先生の人生は即、尾道文化史でもあるからだ。戦後の荒廃期に、いち早く呱々の声をあげた文化研究会。その行事としての劇団の招聘、音楽会の開催、埋没した古美術品の発掘、名所旧跡の探訪、さらに絵画学校の開設、チャーチル会の創立、近く美術館建設の発起など、数えあげれば枚挙にいとまがない。生粋の尾道人以上に深く尾道を愛してくれた先生。私たちは心から「ありがとう」と頭を垂れずには居られない。

小野先生「ボロは着ても心は錦」という浪花節の一節のあることをご存じでしょう。いつもジャンパーに折れ目のとれたズボン。先生ほど邊幅を飾らぬ人は珍しい。でも先生の心は、いつも錦を飾り、今日の秋空のように

澄みきっていることを疑いません。

小野夫人に一言御礼申し上げます。

八方破れの先生の綻びをつくろいながらの御日常、さらに沢山の御子達の御養育、さぞ大変だったろうと御察し申し上げます。先生の旺盛な文化活動も陰の力としての奥様の存在があればこそと改めて厚く御礼申し上げます。奥様を中心とした尾道才媛の集いも豊かな尾道文化の一面を語るものと言えましょう。

最後に、先生、奥様お揃いで、卒寿はおろか、白寿までもご健勝であられることを神に祈り、ご紹介を終ります。

(一九八四年十一月二十七日 地域文化功労者賞受賞祝賀会において)



親睦麻雀会

(手前左から) 進来・藤井武雄・小野・新宅さん
(向こう) 島居・森・宮地さん



新年家族会で宮地さんの絵が当った大林さん
(左から) 青木秋義・大林・宮地さん・小野先生

財間八郎先生の卓話『三百回』を辿る

Sはスライド、話は卓話

| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|--|
| 35 | 3 | 25 | S | 尾道のあけばの (会場は竹村家の大広間。はじめてのロータリーだ。内心ビクビクもの、おなじみの小野先生が「大丈夫、私が側におるよ」と。これで一安心。) |
| 37 | 6 | 29 | S | 内海平家物語(県のコンクールで優勝した作品) |
| 40 | 5 | 7 | S | 尾道の廃寺 |
| | 10 | 14 | S | 文学のこみち(会場は三成の竹村家別館) |
| 41 | 12 | 16 | S | 義経の旅 |
| 43 | 3 | 1 | 話 | 幕末の尾道(昭和40年に発見された西国寺金堂のらく書を資料として加藤日記を解説) |
| | 4 | 5 | 話 | お天気日本史(天然現象と戦争の勝敗についての話) |
| | 5 | 17 | 話 | 瓜二つ(日本と外国のよく似た史実について) |
| | 6 | 7 | S | みちのくの旅 |
| | 8 | 16 | 話 | 後南朝秘話 |
| 44 | 2 | 7 | S | 川中島 |
| | 12 | 12 | 話 | 鳴瀧城址 (高橋武さんから「ゲスト欠席、助け船たのむ」「今日はネクタイが無い」「無くてかまわぬ。題は鳴瀧城」ジャンパー、ノーネクタイでとんでいった。) |
| 45 | 5 | 22 | 話 | 文化財うら話 |
| | 8 | 28 | S | 日本史シリーズ(1)日本の誕生 (藤井武雄さんから要請「一カ年の常雇で同じテーマで、一カ年のロングラン」と。それが平成十年までつづいている。今日から日本史シリーズ22編をはじめる。) |
| | 9 | 18 | S | 飛鳥と近江 |
| | 10 | 10 | S | 奈良の都 |
| | 11 | 29 | S | 平安王朝 |
| | 12 | 11 | S | 武士起る。(この辺から資料多く30分ではむずかしくなる。) |
| 46 | 2 | 19 | S | 平家の旅 |
| | 3 | 19 | S | 鎌倉の府 |
| | 4 | 16 | S | 太平記の頃 |
| | 5 | 21 | S | 室町の世 |
| | 6 | 18 | S | 戦国の乱れ |
| | 7 | 30 | S | 安土の巻 |
| | 8 | 27 | S | 桃山の巻 |
| | 9 | 17 | S | 江戸の巻 |
| | 10 | 8 | S | 江戸の幕府 |

| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|--|
| 46 | 11 | 26 | S | 江戸の文芸 |
| | 12 | 17 | S | 夜明け前 |
| 47 | 1 | 28 | S | 江戸から東京へ（1）（事件多く解説に時間がかかる） |
| | 2 | 18 | S | 江戸から東京へ（2） |
| | 3 | 24 | S | 明治の躍進（1） |
| | 4 | 28 | S | 明治の躍進（2） |
| | 5 | 26 | S | 明治の文芸 |
| | 6 | 23 | S | 大正の明暗・昭和の激動 (22ヶ月に亘った日本史シリーズここに終る。ご感想如何？ソッと聞いてみたいもの) |
| | 7 | 28 | S | 新平家物語（1）保元と平治 (NHK 大河ドラマ新平家物語を教科書にして、スライドを作つてみた。長谷川先生「教員時代を思い出す」と。) |
| | 9 | 8 | S | 新平家物語（2）海の平家 |
| | 9 | 29 | S | 新平家物語（3）ゆらぐ平家 |
| | 10 | 30 | S | 新平家物語（4）落ちゆく平家 |
| | 12 | 1 | S | 新平家物語（5）漂う平家 |
| 48 | 2 | 23 | S | 新平家物語（6）亡ぶ平家 |
| | 3 | 30 | S | 尾道のあけばの一高須 |
| | 4 | 20 | S | 尾道のあけばの一西藤（2カ所とも新発掘だが短いもの） |
| | 5 | 11 | S | 尾道千年（1）一大田庄まで |
| | 6 | 15 | S | 尾道千年（2）一浄土寺再建まで |
| | 8 | 3 | S | 尾道千年（3）一鎌倉時代終期まで |
| | 10 | 12 | S | 尾道千年（4）一戦国末期まで（山城を入れて） |
| | 11 | 30 | S | 尾道千年（5）一江戸末期まで |
| 49 | 1 | 18 | S | 尾道千年（6）一明治を迎えて |
| | 2 | 15 | 話 | 文化財身の上話（持光寺） |
| | 3 | 15 | 話 | 文化財身の上話（光明寺）（お望みによって古寺巡りをはじめる） |
| | 4 | 19 | 話 | 古寺巡り（1）持光寺から天寧寺まで（30分では不足のようだ） |
| | 5 | 31 | 話 | 古寺巡り（2）千光寺・正授院から慈観寺まで |
| | 6 | 21 | 話 | 古寺巡り（3）妙宣寺から西国寺まで |
| | 7 | 26 | 話 | 古寺巡り（4）金剛院から西郷寺まで |
| | 9 | 27 | 話 | 古寺巡り（5）淨土寺 |
| | 10 | 25 | 話 | 古寺巡り（6）淨土寺終る |
| | 11 | 29 | S | 備後路（1）備中境いから草戸まで (新作はじめる。備中・備後の国境には田圃の中へ大きな溝が長く掘り切つてあったのには驚いた) |

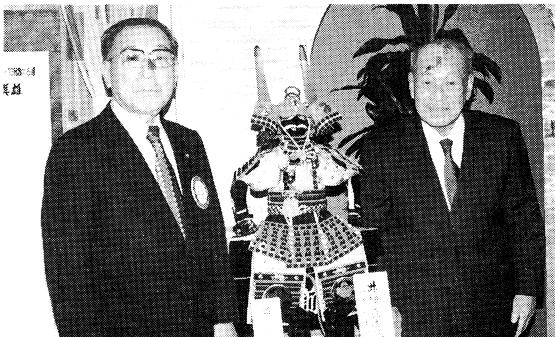
| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| 49 | 12 | 20 | 話 | 神辺の史跡（スライド種切れ、ちょっと昔話をはさんだ。） |
| 50 | 1 | 24 | S | 備後路（2）今津まで |
| | 4 | 25 | S | 備後路（3）尾道西御所まで |
| | 5 | 30 | S | 備後路（4）吉和から木原まで（山陽道が大きく変っているのでむずかしい。） |
| | 9 | 26 | S | 備後路（5）三原まで (ここから西へ沼田川を渡れば安芸国。10・11・12と3ヵ月余った。会員の中から「赤穂事件」とご注文。急に3ヵ月だけ組んでみたが、不充分だ。) |
| | 10 | 24 | 話 | 五代将軍綱吉 |
| | 11 | 21 | 話 | 吉良と大石 |
| | 12 | 19 | 話 | 赤穂事件（元来私は赤穂事件が大きらい。これで終っておく。） |
| 51 | 1 | 23 | 話 | 平将門 (NHK 大河ドラマ「平将門」のスライドを作るので、その前支度で、ちょっと将門のお話) |
| | 2 | 27 | S | 芸北の芸能（文化財バスで山縣郡の芸能のいろいろ） |
| | 3 | 26 | S | 京都八社参り |
| | 4 | 21 | S | 吉野山と高野山 |
| | 5 | 28 | 話 | 平将門（1）天慶の乱について |
| | 6 | 18 | 話 | 平将門（2）神告まで |
| | 7 | 30 | 話 | 平将門（3）将門をめぐる人々 |
| | 8 | 20 | 話 | 平将門（4）南海の海賊 |
| | 11 | 26 | 話 | 平将門（5）秀郷起つ |
| | 12 | 24 | 話 | 平将門（6）将門亡ぶ |
| 52 | 1 | 28 | S | 大和八社巡り |
| | 2 | 25 | 話 | 出雲の神話（1） (この回から、お話が主になって今日に至っている。会場が狭く、暗室装置が難しいので) |
| | 3 | 22 | 話 | 出雲の神話（2） |
| | 5 | 27 | 話 | 日本の城郭（1）（会員からのご注文で……。） |
| | 6 | 17 | 話 | 日本の城郭（2） |
| | 7 | 22 | 話 | 尾道の山城（1） |
| | 8 | 26 | 話 | げんこつ和尚（何故ここへ「げんこつ」が出たか、今ではわからない。） |
| | 9 | 16 | 話 | 尾道の山城（2） |
| | 10 | 28 | 話 | 尾道の山城（3） |
| | 11 | 25 | 話 | 尾道の廃寺（1）西光寺・満常寺 |
| | 12 | 9 | 話 | 尾道の廃寺（2）淨正庵・地福寺 (この4ヶ寺は吉和・木之庄東に所在。比較的よく旧状の保存されているもの) |
| 53 | 2 | 24 | 話 | 名馬揃（今年は午の歳。古今の名馬のお話） |

| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| 53 | 4 | 28 | 話 | 尾道の廃寺（3）吉祥坊・成福寺 |
| | 6 | 23 | 話 | 尾道の廃寺（4）水之庵・満福寺（この4ヶ寺は旧市内にあったもの） |
| | 7 | 21 | 話 | 日本の水軍（1）遣唐使の頃まで |
| | 8 | 25 | 話 | 日本の水軍（2）源平合戦の頃まで |
| | 9 | 22 | 話 | 日本の水軍（3）足利義満天寧寺参詣まで |
| | 10 | 20 | 話 | 日本の水軍（4）八幡船活躍の頃まで |
| | 12 | 15 | 話 | 日本の水軍（5）厳島の戦の頃まで |
| | 12 | 29 | 話 | 日本の水軍（6）江戸初期まで |
| 54 | 1 | 19 | 話 | 未歳漫談（今年のエトの未歳について） |
| | 2 | 16 | 話 | 鎌倉三代（1）頼朝の旗揚げ (NHK大河ドラマ「草萌える」に因んで「頼朝・頼家・実朝」の三代を採り上げた。) |
| | 3 | 16 | 話 | 鎌倉三代（2）山本夜討 |
| | 4 | 20 | 話 | 鎌倉三代（3）政子の怒り (ここで卓話100回。森信蔵会長から記念の盾を頂いた。) |
| | 5 | 18 | 話 | 鎌倉三代（4）大姫の悲恋 |
| | 6 | 15 | 話 | 鎌倉三代（5）義経流浪 |
| | 7 | 27 | 話 | 鎌倉三代（6）平泉征服 |
| | 8 | 24 | 話 | 鎌倉三代（7）梶原失脚 |
| | 9 | 28 | 話 | 鎌倉三代（8）時政引退 |
| | 10 | 26 | 話 | 鎌倉三代（9）渡宋失敗 |
| | 11 | 30 | 話 | 鎌倉三代（10）大乱前夜 |
| | 12 | 21 | 話 | 鎌倉三代（11）承久の乱 |
| 55 | 1 | 25 | 話 | 江戸から東京へ（1）和宮東下 |
| | 2 | 29 | 話 | 江戸から東京へ（2）会津守護職 |
| | 3 | 28 | 話 | 江戸から東京へ（3）七卿都落 |
| | 4 | 25 | 話 | 江戸から東京へ（4）禁門の変 |
| | 5 | 23 | 話 | 江戸から東京へ（5）薩長連合 |
| | 6 | 27 | 話 | 江戸から東京へ（6）孝明帝崩御 |
| | 7 | 18 | 話 | 江戸から東京へ（7）鳥羽伏見の戦 |
| | 8 | 15 | 話 | 江戸から東京へ（8）勝と西郷 |
| | 9 | 19 | 話 | 江戸から東京へ（9）東京行幸 |
| | 10 | 7 | 話 | 江戸から東京へ（10）征韓論 |
| | 11 | 21 | 話 | 江戸から東京へ（11）西南の役 |
| | 12 | 12 | 話 | 江戸から東京へ（12）大陸へ志向 |

| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| 56 | 1 | 12 | 話 | 中国史談 (1) 呉と越 (1) (三国志という注文が出そうなので、先手を取って中国史談を取り上げたが地名・人名がむづかしい) |
| | 2 | 13 | 話 | 中国史談 (2) 呉と越 (2) |
| | 3 | 20 | 話 | 中国史談 (3) 呉と越 (3) |
| | 4 | 7 | 話 | 中国史談 (4) 呉と越 (4) |
| | 5 | 15 | 話 | 中国史談 (5) 足切軍師 (1) |
| | 6 | 19 | 話 | 中国史談 (6) 足切軍師 (2) |
| | 7 | 17 | 話 | 中国史談 (7) 足切軍師 (3) |
| | 8 | 28 | 話 | 中国史談 (8) 易水の風 |
| | 9 | 18 | 話 | 中国史談 (9) 秦の始皇帝 |
| | 10 | 16 | 話 | 中国史談 (10) 陳・呉の挙兵 (「王侯将相何ぞ種あらんや」と言うと「オゝ、あんなの習ったのう」と共感の声あり) |
| | 11 | 27 | 話 | 中国史談 (11) 劉邦起つ |
| | 12 | 18 | 話 | 中国史談 (12) 劉・項並進 |
| 57 | 2 | 19 | 話 | 中国史談 (13) 項羽入閥 |
| | 3 | 19 | 話 | 中国史談 (14) 鴻門の会 (尾道短大学長福田先生入会。その前での「中国史談」は少々固くなる。先生曰く「鴻門の会は史記中の白眉」と。) |
| | 4 | 16 | 話 | 中国史談 (15) 張良韓信を説く |
| | 5 | 28 | 話 | 中国史談 (16) 劉邦の出撃 |
| | 6 | 18 | 話 | 中国史談 (17) 兵権を奪う |
| | 7 | 23 | 話 | 中国史談 (18) 広武の対陣 |
| | 8 | 20 | 話 | 中国史談 (19) 項羽亡ぶ |
| | 9 | 10 | 話 | 中国史談 (20) 匈奴と和す |
| | 10 | 22 | 話 | 中国史談 (21) 呂后 |
| | 11 | 19 | 話 | 中国史談 (22) 名将の出現 |
| | 12 | 24 | 話 | 中国史談 (23) シルクロード (2カ年に亘る長編中国史談終る。つづく「三国志」はいつになるか?) |
| 58 | 1 | 28 | 話 | 徳川家康 (1) 松平氏について (NHK 大河ドラマ「徳川家康」と並行して「家康を語る」) |
| | 2 | 23 | 話 | 徳川家康 (2) 初陣 |
| | 3 | 25 | 話 | 徳川家康 (3) 一向一揆 |
| | 4 | 15 | 話 | 徳川家康 (4) 三方原 |
| | 5 | 20 | 話 | 徳川家康 (5) 長篠 |
| | 6 | 17 | 話 | 徳川家康 (6) 本能寺 |

| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| | 7 | 15 | 話 | 徳川家康 (7) 小牧・長久寺 |
| 58 | 8 | 19 | 話 | 徳川家康 (8) 秀吉外征 |
| | 9 | 16 | 話 | 徳川家康 (9) 太閤の死 |
| | 10 | 7 | 話 | 徳川家康 (10) 細川ガラシヤ |
| | 11 | 18 | 話 | 徳川家康 (11) 天下分目 |
| | 12 | 16 | 話 | 徳川家康 (12) 将軍宣下 |
| 59 | 1 | 20 | 話 | 徳川家康 (13) 大坂冬の陣 |
| | 2 | 17 | 話 | 徳川家康 (14) 大坂夏の陣 |
| | 3 | 16 | 話 | 太閤茶屋 (卓話家康が終った。一息つくため、尾道三成の「太閤茶屋」をはせた。) |
| | 4 | 20 | | 三国志 (1) 勇将呂布 (入船さんからのご注文「三国志を」と。「待っていました」と引受けた。) |
| | 5 | 18 | 話 | 三国志 (2) 曹操挙兵 |
| | 6 | 15 | 話 | 三国志 (3) 洛陽燃ゆ |
| | 7 | 20 | 話 | 三国志 (4) 王允の計 |
| | 8 | 17 | 話 | 三国志 (5) 劉皇権叔 |
| | 9 | 21 | 話 | 三国志 (6) 関羽の義 |
| | 10 | 12 | 話 | 三国志 (7) 官渡の戦 |
| | 11 | 30 | 話 | 三国志 (8) 奇才徐庶 (ここで大軍師孔明が出る。みなさんお待ちかね。) |
| | 12 | 21 | 話 | 三国志 (9) 趙雲と張飛 |
| 60 | 1 | 11 | 話 | 三国志 (10) 孔明呉に下る (この辺から人物が揃ったので、面白くなつたらしい。) |
| | 2 | 15 | 話 | 三国志 (11) 周瑜の決意 (今月は特に興が深かったか、眼の色がちがっていた。) |
| | 3 | 15 | 話 | 三国志 (12) 連環の計 |
| | 4 | 19 | 話 | 三国志 (13) 短歌行 |
| | 5 | 17 | 話 | 三国志 (14) 華容道 |
| | 6 | 21 | 話 | 三国志 (15) 美女の餌 |
| | 7 | 19 | 話 | 三国志 (16) 劍舞の宴 |
| | 8 | 16 | 話 | 三国志 (17) 益州占拠 |
| | 9 | 20 | 話 | 三国志 (18) 関羽の武威 |
| | 10 | 18 | 話 | 三国志 (19) 玄徳即位 |
| | 11 | 15 | 話 | 三国志 (20) 出師表 |
| | 12 | 20 | 話 | 三国志 (21) 最後の出兵 |
| 61 | 1 | 24 | 話 | 三国志 (22) 孔明病む |
| | 2 | 21 | 話 | 三国志 (23) 秋風五丈原 (足かけ2年に及んだ大作三国志ここに終る。) |

| 昭和 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| | 3 | 14 | 話 | 足利尊氏 (1) 後醍醐即位 (今年は尊氏の浄土寺参籠650年に当る。今までいろいろ言われた尊氏だが、もうよかろうと取り上げたのだ。) |
| 61 | 4 | 18 | 話 | 足利尊氏 (2) 船上山 |
| | 5 | 16 | 話 | 足利尊氏 (3) 大塔宮入洛 |
| | 6 | 20 | 話 | 足利尊氏 (4) 建武新政 |
| | 8 | 15 | 話 | 足利尊氏 (5) 尊氏鎌倉へ |
| | 9 | 19 | 話 | 足利尊氏 (6) 多々羅浜 |
| | 10 | 17 | 話 | 足利尊氏 (7) 浄土寺参詣 |
| | 11 | 21 | 話 | 足利尊氏 (8) 渕川 |
| | 12 | 19 | 話 | 足利尊氏 (9) 一天三帝 |
| 62 | 2 | 27 | 話 | 足利尊氏 (10) 尊氏について |
| | 3 | 20 | 話 | 足利尊氏 (11) 正閑論 (1) |
| | 5 | 15 | 話 | 足利尊氏 (12) 正閑論 (2) |
| | 6 | 19 | 話 | 伊達政宗 (これは仙台方面へ旅行したのでそのお土産話) |
| | 7 | 17 | 話 | 放談日本史 (1) 壬申の乱 (放談とは、つまり言いたい放題に話すこと。) |
| | 8 | 21 | 話 | 放談日本史 (2) 遣唐使 |
| | 9 | 18 | 話 | 放談日本史 (3) 道鏡 (1) |
| | 10 | 16 | 話 | 放談日本史 (4) 道鏡 (2) |
| | 11 | 20 | 話 | 放談日本史 (5) 空海 |
| | 12 | 18 | 話 | 【200回記念講演】井伊の赤備 (あかぞなえ) 今回で卓話200回完了、会長松岡さんから記念品井伊の赤備の具足を頂いた。そこで卓話は演題変更、今夜の記念品「井伊の赤備」の一席。 |
| 63 | 1 | 22 | 話 | 放談日本史 (6) 菅公 |
| | 2 | 19 | 話 | 放談日本史 (7) 八幡殿 |
| | 3 | 18 | 話 | 放談日本史 (8) 平相国 |
| | 4 | 15 | 話 | 放談日本史 (9) 九郎判官 |
| | 5 | 20 | 話 | 放談日本史 (10) 平泉三代 |
| | 6 | 17 | 話 | 放談日本史 (11) 承久の乱 |
| | 7 | 15 | 話 | 放談日本史 (12) 蒙古襲来 |
| | 8 | 19 | 話 | 放談日本史 (13) 菊水の旗 |
| | 9 | 16 | 話 | 放談日本史 (14) 六字の城 |
| | 10 | 21 | 話 | 放談日本史 (15) 本能寺 |
| | 11 | 18 | 話 | 放談日本史 (16) 千利休 |
| | 12 | 16 | 話 | 放談日本史 (17) 小西行長 |



井伊の赤備えの甲冑を中心に財間先生と松岡会長

| 平成 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| 元 | 1 | 13 | 話 | 巳歳の話（「エト」に因んで巳歳つまり「へび」の話） |
| | 1 | 20 | 話 | イリアッド（1）パリスの船出 (お好みによって卓話は今日から当分西洋史に変る。お話は面白いが、地名・人名がカタカナだから舌がうまくまわらない。) |
| | 2 | 17 | 話 | イリアッド（2）ギリシヤ軍出征 |
| | 3 | 17 | 話 | イリアッド（3）ギリシヤ軍トロヤ軍激戦 |
| | 4 | 21 | 話 | イリアッド（4）アキレスとヘクトル |
| | 5 | 12 | 話 | イリアッド（5）木馬 |
| | 6 | 16 | 話 | ギリシヤ史話（1）ペルシヤ戦役（1） |
| | 7 | 21 | 話 | ギリシヤ史話（2）ペルシヤ戦役（2） |
| | 8 | 18 | 話 | ギリシヤ史話（3）サラミスの海戦 |
| | 9 | 8 | 話 | ギリシヤ史話（4）テーベの勃興 |
| | 10 | 20 | 話 | ギリシヤ史話（5）エパミノンダス |
| | 11 | 17 | 話 | アレキサンダー大王（1） |
| 2 | 1 | 19 | 話 | アレキサンダー大王（2） |
| | 3 | 16 | 話 | ローマ史話（1）第1回ポエニ戦争 |
| | 4 | 20 | 話 | ローマ史話（2）ハンニバルの活躍 |
| | 5 | 18 | 話 | ローマ史話（3）ローマの圧迫 |
| | 6 | 15 | 話 | ローマ史話（4）カルタゴ亡ぶ |
| | 7 | 27 | 話 | ローマ史話（5）賽は投げられたり |
| | 8 | 17 | 話 | ローマ史話（6）ファルザルスの決戦（この頃小野先生逝く。身辺寂寥を覚える。） |
| | 9 | 21 | 話 | ローマ史話（7）シーザーの勲業（この月下旬空病臥。3ヶ月も休む。） |
| 3 | 1 | 18 | 話 | ローマ史話（8）シーザー倒る |
| | 3 | 15 | 話 | ローマ史話（9）アントニーとクレオパトラ |
| | 3 | 22 | 話 | ローマ史話（10）蛇毒芳魂を送る（これで西洋史物語はストップ。） |
| | 4 | 19 | 話 | 太平記の世界（1）笠置山 (長年に亘る皇国史觀によって歪められた南北朝史がやっと正常にもどって語られるようになった。) |
| | 5 | 31 | 話 | 太平記の世界（2）足利と新田 |
| | 6 | 21 | 話 | 太平記の世界（3）稻村が崎 |
| | 7 | 19 | 話 | 太平記の世界（4）新政破綻 |
| | 8 | 23 | 話 | 太平記の世界（5）九州へ走る |
| | 9 | 20 | 話 | 太平記の世界（6）法楽和歌 |
| | 10 | 18 | 話 | 太平記の世界（7）湊川 |
| | 11 | 15 | 話 | 太平記の世界（8）一天三帝 |

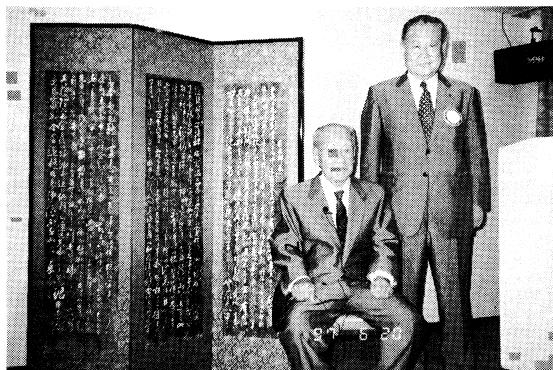
| 平成 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|---|
| 3 | 12 | 20 | 話 | 太平記の世界 (9) 巨星南北に落つ (史上で小さくなっていた尊氏も、これからは堂々と日本史上に現れるようになった。) |
| 4 | 1 | 17 | 話 | 織田信長 (1) その時代 (NHK 大河ドラマは「信長」、これを異った方面から話すことにする。) |
| | 2 | 21 | 話 | 織田信長 (2) 信長と軍制 |
| | 3 | 27 | 話 | 織田信長 (3) 信長あぶない |
| | 4 | 17 | 話 | 織田信長 (4) 信長と女 |
| | 5 | 15 | 話 | 織田信長 (5) 信長と鉄砲 |
| | 6 | 19 | 話 | 織田信長 (6) 中世から近世へ |
| | 7 | 17 | 話 | 織田信長 (7) 信長と京風 |
| | 8 | 28 | 話 | 織田信長 (8) 信長と城 |
| | 9 | 18 | 話 | 織田信長 (9) 信長と楽市樂座 |
| | 10 | 16 | 話 | 織田信長 (10) 信長と南蛮文化 |
| | 11 | 20 | 話 | 織田信長 (11) 信長の心の荒み |
| | 12 | 18 | 話 | 織田信長 (12) 人間50年 |
| 5 | 1 | 22 | 話 | 琉球小史 (大河ドラマはとんでもないものをやり出した。私も負けずに取り上げたが、これは中々しんどそうだ。) |
| | 2 | 12 | 話 | 琉球の風 (1) |
| | 3 | 19 | 話 | 琉球の風 (2) |
| | 4 | 16 | 話 | 琉球の風 (3) |
| | 5 | 21 | 話 | 琉球拾遺 |
| | 6 | 4 | 話 | 弓張月 (種が尽きたので琉球ものの白眉、馬琴の傑作「弓張月」で最後の30分を終る。) |
| | 7 | 16 | 話 | 源頼義 (1) (大河ドラマは南方琉球から一飛びに東北「みちのく」にとんだ。「炎 (ほむら) 立つ」は、これ「前九年・後三年の役」に相応するもの。組みし易し。) |
| | 8 | 30 | 話 | 源頼義 (2) |
| | 9 | 24 | 話 | 八幡太郎 (1) |
| | 11 | 12 | 話 | 八幡太郎 (2) (組みし易しと安心していると、どっこいこの大河ドラマは全く東北 (安倍氏) を主にした作品で今までの国民的英雄八幡太郎もサッパリ形無しだ。むづかしいぞ。) |
| | 11 | 19 | 話 | 藤原清衡 |
| | 12 | 17 | 話 | 藤原秀衡 |
| 6 | 2 | 18 | 話 | 藤原泰衡 (1) |
| | 3 | 11 | 話 | 藤原泰衡 (2) |
| | 3 | 18 | 話 | 何故もろく亡びたか? (毎週忠実にテレビを見てお話を組み代える。随分疲れる番組だった。) |



感謝状を朗読の松岡会長と後は福島副会長

| 平成 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|----|----|----|--|
| 6 | 4 | 8 | 話 | 義政と富子 (1) (これも亦、今まで一度もドラマにならなかった時代。即ち室町時代の暗黒時代。つまり応仁の乱頃の物語—これも難物だ。) |
| | 6 | 17 | 話 | 義政と富子 (2) |
| | 7 | 15 | 話 | 義政と富子 (3) |
| | 8 | 22 | 話 | 義政と富子 (4) (9月に入ると病臥。年末まで病床の人。) |
| 7 | 1 | 20 | 話 | 江戸の点描 (1) 朱印船 (1) (NHK 大河ドラマは「吉宗」、今度は「江戸の点描」と題して、265年の幕政の興味深いお話を組んでみた。) |
| | 2 | 24 | 話 | 江戸の点描 (2) 朱印船 (2) |
| | 3 | 17 | 話 | 江戸の点描 (3) 伊賀の水月 (1) |
| | 4 | 21 | 話 | 江戸の点描 (4) 伊賀の水月 (2) |
| | 5 | 19 | 話 | 江戸の点描 (5) 慶安太平記 (1) |
| | 6 | 9 | 話 | 江戸の点描 (6) 慶安太平記 (2) |
| | 7 | 14 | 話 | 江戸の点描 (7) 天下一 (1) |
| | 8 | 11 | 話 | 江戸の点描 (8) 天下一 (2) |
| | 9 | 8 | 話 | 江戸の点描 (9) 山陽先生 |
| | 11 | 10 | 話 | 江戸の点描 (10) 最後の将軍 (1) |
| | 12 | 8 | 話 | 江戸の点描 (11) 最後の将軍 (2) (「最後の将軍」は各所で好評だった。「トゲトゲしい現代に於て、まことに心温まるお話だ」と。) |
| 8 | 1 | 19 | 話 | 秀吉という人 |
| | 2 | 9 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (1) 蜂須賀小六 |
| | 3 | 8 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (2) 竹中半兵衛 |
| | 4 | 12 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (3) 黒田官兵衛 |
| | 7 | 19 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (4) 大和大納言 |
| | 8 | 23 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (5) 千利休 |
| | 9 | 20 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (6) 小西行長 |
| | 10 | 18 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (7) 石田三成 |
| | 11 | 15 | 話 | 秀吉をめぐる人々 (8) 金吾中納言 |
| 9 | 1 | 17 | 話 | 毛利元就 (1) 初陣 (NHK 大河ドラマは郷土の英雄毛利元就を取り上げたが、元就本人と尾道はまことにご縁がうすい。) |
| | 2 | 21 | 話 | 毛利元就 (2) 宗家をつぐ |
| | 4 | 4 | 話 | 毛利元就 (3) 郡山合戦 |
| | 4 | 12 | 話 | 毛利元就 (4) 出雲遠征 |

| 平成 | 月 | 日 | 種別 | 演題 |
|----|---|----|----|--|
| 9 | 6 | 20 | 話 | <p>【300回記念講演】出師表 (卓話300回。記念品は渋谷会長さんから「出師表（宋末の忠臣 岳飛筆）の屏風を頂く。 今日のお話は「出師表について」これは又難題だ。出師表は三国志の終り近くに出てくる。 だから30分での三国志を話さねばならぬ。 やっとしゃべった。 「アッシュンド！」</p> |
| | 7 | 18 | 話 | 毛利元就（5）大内亡ぶ |
| | 8 | 22 | 話 | 毛利元就（6）厳島前夜 |
| | 9 | 26 | 話 | 毛利元就（7）決戦厳島 |



出師表の屏風をバックに財間先生と渋谷会長

財間先生の卓話

入船 裕二

「なんと、財間先生の卓話が200回になるんじゃが記念品をどうしたもんじゃろうかのう」と言ってきたのは寺本守三君、昭和62年の秋。時の会長は松岡真雄持光寺の先のご住職だった。

私の頭をよぎったのは、先生が甲冑をずいぶん研究され、写真もたくさん撮っておられるといつかお聞きした話。幸い会員に山崎太一郎君がいた。早速、カタログを取り寄せてもらう。ミニチュアだが、玩具のようなものではない。頼朝、信長、秀吉、家康など名立たる武将の甲冑の写真があった。私はためらわずに井伊の赤備えを選んだ。

その3年前、こんなことがあった。経済同友会尾道支部の親睦旅行で彦根、関ヶ原を訪ねた。昭和59年11月のことだ。特別ゲストで財間先生に同行をお願いして京都から専用バス。妙齢のバスガイドに、今日は貴女はお客様で喋らんでもえんですよと、まず口止め。

関ヶ原へ着くまで天下分け目の一戦、先生の独壇場。ふくれ面だったガイドも得心がいった。夕方、彦根城へ登る。折からの紅葉を井伊の赤備えに見立てて漢詩一首を詠んで先生の御褒めに預かった。

昭和62年12月18日、200回記念卓話の日が来た。会場正面に井伊の甲冑。さすがに先生もあっと驚かれたようだが、松岡会長の感謝状朗読にいたく感激された。

この日の卓話の予定は「放談日本史」第6回菅公だったが、プログラム委員長はおそるおそる予定を変更して「赤備え」にまつわるお話をとお願いする。先生ただちに快諾。

裏話をすると、この日の演出は先生にはいっさいノーコメント。卓話のテーマもブツケ本番。そんなことをして大丈夫かと小倉伊徳さんが心配そうに聞く。「大丈夫」と私はエラそうに答えた。

もともと先生は卓話の前に詳しい原稿を書かれ、マイクの前で何度も声を出して繰り返し読み込まれ、時間なども

計って準備を整えられると聞いている。この日はほんとのブツケ本番なのだ。しかし、私はすこしも心配しなかった。

食後、卓話が始まる。名調子はいつもの如し。井伊家の起りから始まって、徳川四天王の話。武田滅亡から赤備えの由来。関ヶ原から大坂夏の陣と説き進んで年月日、登場人物、財間節は流れるようにこの日も格調高かった。わずかな食事時間の間に頭の中で先生のファイルは見事に編集が行なわれたのだろうと感服した。

尾道クラブでの先生の卓話は300回を越した。私は昭和38年1月の入会だから第3回目からお話を拝聴したことになる。いまこの「卓話300回」の演題を見て懐かしい思い出が蘇ってくる。始めはスライドが多かった。「日本史シリーズ」「新平家物語」「尾道千年」など。色鮮やかな

カラースライド。先生はカメラも名手であられる。私も旅に出で専らスライドを撮るようになった。

「中国史談」が始まったのが56年12月、「三国志」は59年4月、「ギリシャ・ローマ史話」は平成元年1月。いずれも私がお願いしたものだ。一部では「わかりやせんが」とコボす人もあったようだが、

かまわず続けていただいた。録音したカセットはすべて尾道市立図書館に寄贈。市民の方に喜ばれ、ダビングされて国内はおろか「三国志」は本場の中国で、日本語を解するガイドや、日本人観光客に拍手喝采を受けているのである。

300回記念は平成9年6月。渋谷会長から記念品の相談を受けた。前回の甲冑を受けて、太刀、弓、槍、矢ワンセットで揃わないかと思ったが難しかった。役員会で誰かが「屏風どうかな」と言った。すぐ「出師表」が頭に浮んだ。拓本を屏風にしよう。幸い拓本の当てもある。

300回記念の日、卓話は「出師表」。今度はあらかじめお願いした。その必要はもちろん無いのだが、「三国志」を30分にちぢめるのはドダイ無理な話と思ったからだ。今度も快諾してくださった。

300回のお話の中で、ふしぎなことに始め頃のお話をよく覚えている。昭和43年4月の「お天気日本史」8月の「後南朝秘話」など。どちらも先生の著書「藻塩草」に収



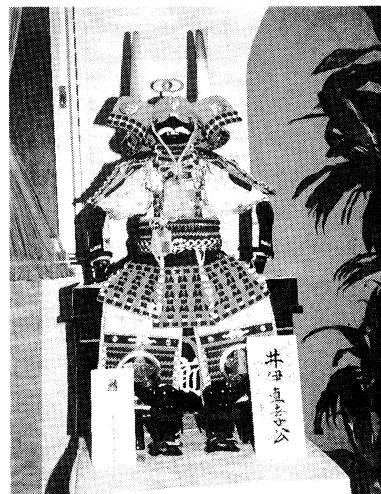
講演中の財間八郎先生

められているのだが、文章よりもはるかに迫力がある。いつかアンコール番組をお願いしたらどうかと思っている。

プログラム委員長は毎週のゲストスピーカーに苦心する。毎月1回1年間引き受け下さるのがどんなに有難いことか。こんな妙案を考え出したのは今は亡き藤井武雄さんだが、通算300回いまさらのように先生の偉大さを思い感謝の念を深くする。



30周年式典で来賓の財閥先生と懇談の小野先生



井伊の赤備えの甲冑